PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

PL
723
F84

Ruruya, Tsunatake
Sakka no sekai

East Asia

界世の家作

著武綱谷古

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/sakkanosekai00furu

界世の家作

著武綱谷古

版房書塚赤

PL
723
T84

LIBRARY
NOV 26 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

目次

才能と誠實　九
新人の弱點　一七
北原武夫その他　二三
○丹羽文雄の現狀　三八

田畑修一郎の孤獨性その他　五五
中山義秀の新しき出發に寄す　六五
十和田操について　七五
火野葦平について　八六
中里恒子について　九五
中原中也のこと　一〇一
上田廣　山田清三郎　小山いと子　一〇六
文章のこと　一一六

川端康成の文章　一二一
藝術の表現形式　一二八
○「旅さき」作家　一三二
作家本來の姿　一三七
日常生活から　一四八
跋　一五九

才能と誠實

素晴らしい文學的才能といふものは、もちろん天才にのみ惠まれたものである。しかし世界の文學史を通じても、數へるほどしかない、さういふ異常な存在は、ここでは問題の對象ではない。

私が、今ここで問題の對象としようとしてゐる作家たちは、日本の昭和文壇のなかだけでも、數十人、數百人をかぞへることのできるやうな、さういふ作家たちの場合である。さういふ作家たちは、もちろん天才ではない。その作品の大部分も、末ながくひとびとに愛讀されるよりは、歴史の波に消し去られてゆくであらう。

しかし、さういふ存在のなかにこそ、現代は、つよく生きてゐるのである。現代人として

の私たちが尊敬しなければならない現代が、そこにあるのである。それが天才の溫床であるからといふだけの理由からではない。またそこに時代の文化的水準があるからといふだけの理由からでもない。ときの讀者に感動を與へてゐる大部分の、その時代の作品は、このなかにあるのである。私たちが、さまざまな文學上の問題を考へる文學的環境も、將にそこにある。つまり、それが文壇だ。私は、天才たちの仕事を尊重するやうに、文壇をも尊重する。そして、ここでは、さういふ現代の文壇の作家たちを對象として、この感想を述べるのである。

私は、さういふ現代の文壇作家たちが、無暗に天才主義に走つたり、才能偏重主義を一途に信奉したりすることはよくないと思つてゐる。もう少し違つた側面からも、作家の素質といふものは考へられてよいのである。もちろん、究極においては、結局、才能が、ことをきめる。しかし描く才能といふものは、生きる誠實、あるひは誠實に生きるといふことに比べれば、まだしも、後天的に得られるものである。

才能は、不斷の努力によつても、ある程度までは捕へることができる。しかし生きる誠實

のない人間に、後天的に、これをつけ加へることは、殆んど不可能に近い。それが、この感想の結論である。

私は、最近、「生活者の文學」と題して一文を書いた。この感想は、その續篇に當るのだが、「生活者の文學」のなかでは、私は、一見、この結論と逆に見える意見を述べてゐる。

このごろ多くのひとびとに愛讀されたものは、文壇人の小說ではなく、帝國軍人火野葦平の二作や、貧しい職人の娘豐田正子のものである。

かういふひとたちのものが愛讀されたのは、これらの作品の根據になつてゐる實生活の迫力である。しかし、ここに實生活があるといふだけの理由で、ひとびとに感動を與へることができたと考へるのは間違ひである。彼らは、自分の生活に、眞劍にぶつかつてゐると同時に、その自分の生活を「見る眼」をもつてゐる。そしてそれを、どんな場合にも曇らせてゐない。しかも、この「見る眼」は、ただ見てゐるだけではない。その眼には、生活者としてのモラルが、情熱となつて燃えてゐるのである。

これらの作品のなかにある實生活の迫力が、ひとびとを感動させたことに間違ひはないのであるが、その實生活の迫力を、文學作品のなかに生かし得たのは、彼らが「見る眼」をもつてゐたからであつて、確かに作家としての才能によつてのみ生まれ得た作品である。

火野葦平や豐田正子がなしたやうな實生活をなした人間は、おそらく無數にゐるのである。それにもかかはらず、その多くのひとびとは、かういふものを書くことができなかつた。また私たちの周圍をかへりみても、いろいろ變つた生活をしてゐるから、彼は、きつとよい小說を書くだらうと思はれてゐるやうなひとたちが、かならずしも、よい小說を書いてゐないのである。生活のモラルに燃えてゐる「見る眼」をもつてゐないからである。さう考へると、「見る眼」といふ文學的才能といふものは、誰でもがもつてゐるものではない。むしろ稀有な資質といつた方が適當であらう。そして文學の仕事は、遂に才能の勝利といふことに歸さねばならぬであらう。これが、私の考へてゐるひとつの見方である。

しかし、この場合、私が問題の地盤としてゐるひとたちは、文學のために選ばれた作家た

ちではない。むしろ文學から離れて、眞面目な生活者たちといふ一般人を地盤としていつてゐるのである、彼らは、かならずしも、自分の生活に文學的表現を與へることを願つてゐるひとたちではない。またさういふ願ひをもつてゐるひとたちが、なかにはゐるとしても、彼らは、作家としては、まだ未知數的な存在である。そのなかに葦平と正子をおいて眺めるとき、彼らに人間としての生きる誠實があつたためだけに、あのやうな作品を生み得たと考へるのは適切でない。それはもちろんある。しかしそれは、おそらく葦平や正子以外の實生活者たちもまたもつてゐるものである。それ故、ここでは「見る眼」をもつてゐた彼らの作家的才能を、あれらの作品を生むための決定的なものとして、私はつよく認めるのである。

つまり一般の世間に對しては、作家といふものが、選ばれた專門技術家であるといふことを、私は、はつきりいひたいのである。

しかし、さういふ選ばれた專門技術家、それの集團である文壇といふ地盤の上に、葦平と正子をおいて眺めてみるとき、尊重しなければならない側面は逆になつてくるのである。このなかでは、「見る眼」をもつてゐるといふことは、決して稀有なことではない。彼らの全部

が、「見る眼」をもつたひとたちの集團である。それにもかかはらず、外の作家たちが、一般の讀書階級に與へ得なかつたやうな感動を、彼らが與へることができたのは、「見る眼」が自分たちの實生活をもち、その實生活を捕へてゐるからである。といふことは多くの作家たちが、作家としての描く才能をもちながら、人間としての自分の生活を失つてゐることを反面ものがたつてゐることとなるのだ。そしてさういふ一人間としての生きる誠實をもつてゐない人間は、私は救ひがたい作家だと思つてゐる。才能は、まだしも努力で助長することができる。

最近の文壇の小說を眺めて、私に、かういふことを、もつとも痛感させるのは、いはゆる客觀リアリズム小說といはれてゐる作品の佳作に接する場合である。それと內容空粗な小器用な小說を幾篇でも書きこなしてみせる作家志望者に出會ふ場合である。

いはゆる客觀リアリズム小說の佳作に接すると、實によく觀察してゐる點では感心させられるのである。描く才能も見事である。小說としては一應難點がない。しかしこころに迫つ

てこないのだ。彼らのもつてゐるものは、商賣のための、ものを寫す平板な一枚の鏡だけだ。一人間として生きる誠實が、「見る眼」のモラルとなつて燃えてゐないのである。藝もなく寫してゐるだけである。さういふ作品が一應佳作のごとき樣子を示してゐるのは、作家の偉大さのためではない。その平板な鏡に寫されても、なほ片鱗をとどめてゐる現實の偉大さのためである。

志賀直哉の「和解」のなかに、次のやうな言葉がある。

「事實を書く場合自分にはよく散漫に色々な出來事を並べたくなる惡い誘惑があつた。色々な事が憶ひ出される。あれもこれもと云ふ風にそれが書きたくなる。實際それらは何れも多少の因果關係を持つてゐた。然しそれを片端から書いて行く事は出來なかつた。書けば必ずそれらの合はせ目に不充分な所が出來て不愉快になる。自分は書きたくなる事を巧みに捨てて行く努力をしなければならなかつた」

その捨てる努力を、自分のなかのまとめようとする技術家がなすか、自分のなかの人間としての生きる誠實がなすかで小說が分れるのである。

しかし今日の客觀リアリズム小說のチャンピオンたちに、君たちの作品には、一人間としての生きる誠實がないといつても、もはや絕望的に通じない。もはや手おくれである。彼らは、あまりに玄人になりすぎてしまつたし、あまりに巧い小說が書けるやうになつてしまつた。才能の殉敎者たちである。小說の發達が生んだ人間としの犧牲者たちである。

また人間として誠實に生きてゐないひとたちには、ほんとに訴へたいこと、ほんとに表現したい自分の人生內容などといふものはある筈がないのである。しかしさういふ人間のなかにも、作家志望者はゐる。そして彼らは一應文才といはれるやうなものさへももつてゐる場合がある。さういふ人間は、しかも決してすくなくない。かういふ人間は、もともと、先天的といつてもよいほどまでに、人間としての生きる誠實をもつてゐない。だからいくら人間としての生きる誠實を說いても、もはや絕望的に、それを傳へやうがないのである。

さういふ存在といふものを、「見る眼」に惠まれたひとたちのなかに眺めてゐると、生きる誠實こそ、先天的な資質だと思ひたくなる。人間としての生きる誠實さへもつてゐれば、それを表現するための才能ぐらゐは、努力で自分のものとすることができるのである。

新人の弱點

「新人の技巧について」といふのが與へられた課題である。

新人を問題にする場合、いつも新しい技術をもつたひと、なにか變つた技巧をもつたひと、今までいつも、あまりに、さういふ側からばかり問題にしすぎてきた傾向がありはしないだらうか。

さういふ側からばかり問題にしすぎてきたといふ點については、その理由を二樣と考へることができる。

ひとつには、既成文壇といふものが、たえず、新しい技術、變つた技巧、さういふものがもたらす新鮮さを、渴望してゐる。それが自然に、未知の新人の肩に特に多くのしかかつて

ゆくといふこと、いつもひとびとの期待の大きな觸手のひとつが、そこに動いてゐるといふことだ。

考へられるもうひとつの理由は新人といふものは、一般的には既成文壇より、ずつと年齢が若いと考へてよい。そのために、そのひとたちが提供してみせる現實といふものは、年とつてゐる既成文壇のひとから見ると、どうせ青くさくて、大したことはない。既成文壇のひとたちが、はつきりさう思つてゐるわけではないが、無意識のうちに、その考へに支配されてゐて、せめて感じ方の新しさとか技巧の新鮮さぐらゐな點にしか興味がないといふ態度をとつてゐるともいへるであらう。

この尊重と輕蔑、期待と無期待、さういふものが微妙に交り合つたところから、新人といふと、すぐ技巧の話をもちだされるのではなからうか。

技巧が問題とされるだけあつて、同人雜誌などで少し問題になつたやうな作品を讀んでみると、その技巧のうまみ、新鮮さに驚くことがある。そして、ちよつと魅力を感じる。しか

し、それが單に技巧のための技巧のやうな淺薄なものだと、ちよつとは魅力を感じても、それがほんとの底力をもつてゐないために、すぐ飽きがきてしまふ。

また技巧といふものを、精神からひきはなして考へて、ただ風變りでありたいといふ野心のためだけの、つけやいばの技術で、風變りのための風變りを書くひともあるが、さういふひとは問題外である。しかしさういふ存在は、さすが今日では、新興藝術派の時代に比べれば、すつかり影をひそめてしまつた。もちろん影をひそめるのが當然である。

今日は、新人は技術的にいつたら、むしろどんなひとでも、既成作家にはおとらないといへるかもしれない。もちろんそれが極めて局所的であつたり、末梢的にすぎないなどといふことを、しばらく大目に見るならば。

みんな、實に小說がうまい。むしろ、うますぎるのである、それで結論していへば、今日の新人の特徵は、技巧がうまいといふことになる。

しかし技巧のうまさといふことを、あまりにくつきり印象づけるといふことは、技巧と內容のバランスがとれてゐないためである。その技巧に必適するだけの內容を、新人の作品が

もつてゐないといふことである。そのために技巧のうまさばかりが、いやにキラ〳〵目立つのだといへる事實、技巧だけに支へられて、やつと作品の形をなしてゐるやうな作品がないとはいへないのだ。さういふ作品は、ちよつと押しても、バラバラに解體してしまひさうなはかなさだ。つまり奇形に積みあげた積み將棋の面白さにすぎない。

新人の作品が、かういふ弱點を一般には決定的にもたねばならない理由は、簡單にいへば、常に小説を書くといふことの方が實生活に先行してゐるためである。

まだなんらの生活も始まつてゐないのに、せつせと小説を書く。そこには書くべき生活がないから生活らしきものを無理にしぼりだして、小説らしきものを書くやうになる。さういふ作品は技巧ででも支へるより仕方がない。技巧で支へることで作品らしき形はとつても、ひとに、ほんとの感動を與へる力はないのだ。讀んだひとは少しも感動しないから、技巧のうまさを一生懸命見てゐられる餘裕があるのだ。ほんとに感動すれば、ひとびとは、そんな技巧のことなんかいつてゐないで、その感動の方をいはずにはゐられないであらう。

しかし昔のさういふ風な新人青年は、ずつとロマンテイストであつた、だからさういふひとたちの作品は、一種青春の匂ひをまきちらしてゐた。それに比べて今日の新人青年は、ずつとリアリストで大人のやうに圓滿な常識をもつてゐる。それはもちろん今日の青年の罪ではなく、時代の推移であり、昔と比べて今日といふ時代が、はるかに世智辛くなつてゐることを反映してゐるのであらう。

この點、しかし私は、かならずしも昔の青年の方を讃美はしない。今日の青年は、リアリストなだけ、昔の青年には見られないしつかりさがある、だが氣力と夢に缺けてゐるのだ。文學は夢がなくては色褪せたものである。氣力がなくては、穩かな觀察の報告ができるだけだ。

文學は個性的なものでなければならない。そのひとでなければ書けないものを書かねばならない。今日の力作は、實に無個性で、誰でもある程度努力すれば書けるやうなものが多い。

私は今日の新人に向つて、もつとも痛切にいひたいことは、個性の貧困であり、個性の喪失である。それなくしては新しい技巧も根無し草である。

北原武夫その他

まづ「文藝」を讀んだが、このなかでは、北原武夫氏の「妻」が、出色の讀みごたへある作品である。

この作品は、部分的に、どこといつて特に傑出したところもない代りに、部分的に難點のあるところもない。(そのことが全體の力を弱めてゐるかもしれないが)やつつけ仕事の多いなかに、珍らしく隅々まで推敲されてゐて氣持のよい態度である。ただ一個所だけ、全體の調子を破つてゐて氣にかかるところがある。もちろんこのごろの外の作品には、さういふところが、かならず數ケ所ある。だから讀む方でも諦めて讀むが、こんなにそれがないと、氣持がいいので、却つて、その一個所が妙に氣になつていけない。それで、末梢のことだが、

そのことから先に、ちよと書いておく。第一頁の最後の文章だ。

「けれども、私は間違つてゐた。死の記憶や人間の哀しみといふやうなものは、もつと眼につかない深い場所にあつたのだ。それは亂雜に散らかした中で何處かにしまひ忘れた骨牌の札のやうなものだ。一寸した偶然にさへ出會へば、それはすぐ眼の前に出てくる」

そして、このあとへ、そのちよつとした偶然について書いてゐるが、主人公のさうした微妙な氣持を、作者が記錄してゐるその話はいい。確かにさういふことはあるといふことを讀者に納得させる。

しかし、ここに引用した文章のなかには、全體の調和を破つて、文學青年くさい浮いた一行があつて氣にかかる。「それは亂雜に散らかした中で何處かにしまひ忘れた骨牌の札のやうなものだ」といふ一行である。かなしみの存在の仕方を形容した、この形容句は不必要である。不必要といふよりは、もつと積極的にあつては惡い。交叉點の信號のところで自動車をとめられたとき、ふつと自分でも思ひがけないかなしみが湧いてきたとき、そしてさういふ自分のこころを眺めたとき、「哀しみといふものは」「眼につかない深い場所にあつた」と、

主人公は思つたであらう。そしてそれは「一寸した偶然」で、呼びおこされるものだと思つたであらう。それは直接な感情だ。さういふ直接な感情だけを、直接に正確に讀者の胸に傳へることが、讀者に迫ることである。

「骨牌」をもちだすことは、さういふ直接に傳つてゆく感情を淺め薄める。これで形容しようとしてゐる事實は、人間の普遍的な感情に深く結びついてゐるものでありながら、この形容句は、もつと感情の淺い文學的な思ひつきにしかすぎない。リアリティの追求においては、さういふ、ちよつとした思ひつき的な言葉で、描寫や說明を修飾することは、絕對につつしまねばならぬ。餘韻を消すだけである。さういふ形容詞で思はせぶりに絢爛に身を飾つて許されるのは少女小說だけだ。「妻」においても、この一行を除いてしまつた方が、ここの文章から雜音がなくなり、餘韻もひびく。

「けれども、私は間違つてゐた。死の記憶や人間の哀しみといふものは、もつと眼につかない深い場所にあつたのだ。一寸した偶然にさへ出會へば、それはすぐ眼の前に出てくる」

あの形容句は、いはば作者の文學趣味である。出來上つた作品には、誠に例外的に、あそ

こにだけあんな言葉があつたが、例外的にせよ、ただ一ケ所にせよ、それがあるといふことは、作者の文學性のなかに、それがあるといふことだ。しかもさういふものが、作者のなかに、ひとつの根をもつたものではなからうかと思つたので、私は、この末梢的に見えることを、まづ取りあげた。

根をもつたものではないかと考へたのには、ふたつの理由がある。ひとつは、この出來上つた作品の文章が、妙に乾いた感じのすること、もうひとつは、たとへば「骨牌」といふ字に、「カルタ」といふルビを附してゐること、しかも、妙に神經的にルビを附してゐるのは「骨牌」ひとつだけではない。さういふルビを附された言葉が、幾ケ所もあるのだ。これは一字一句をもゆるがせにしない態度で書いてゐるあらはれには違ひないが、同時にまた皮相的な自分の文學趣味を、變に大切にしなければゐられない淺いポーズからもきてゐる。……をいくつかの言葉に附してゐるのも、そのあらはれだ。推敲の努力の何パーセントかが、このやうな面の修飾に向いてゐることは、作者のなかに、あのやうな形容句を使ひたい趣味が、かなり本質的なものとして存在してゐるためではないかと、臆測したのである。

あのやうな神經が、作品を、ほんとに突つ放しきつてゐない。そして作品を、ほんとに底深く落ちつかせてゐないのだ。つまりそのルビが、そのことを語るために絶對必要なものとは、どうしても見えないのである。それ故、そのルビのやうに、どうしても讀ませたいといふ作者の願ひは、この作品の本質を、讀者に正確に傳へるための努力であるよりは、もつと趣味的なことにすぎない。骨牌を、なぜ、どうしてもカルタと讀まなければ、ここでは困るのか。こつぱいと讀まれては、どうして意味がづれてしまふのか。

かういふことは、決して感覺の纖細などといふことを意味しない。ひとりの男の女に對する感情を惚れたといふ言葉であらはすか、慕ふといふ言葉であらはすか、眞に生活を潜ませた、單なる趣味であることを越えて根のある感覺は、さういふ方面に働かすべきだ。

そこで私は、あの例外的にあつたひとつの形容句のなかに、可成り本質的な、この作者の弱點のひとつを感じるのである。それから先は、私のきわめて大膽な想像にすぎないのであるが、この作品の原型には、あのやうな形容句が、みちみちてゐたのではなからうかといふことである。しかし推敲してゐるうちに、作者の態度は、次第に深く嚴肅になつて、さうい

ふものをつよく除去していつた。そして例外的なあの一句とルビが、作者に氣づかれないまに殘つて、そこから作品の原型を臆測させるきつかけを殘してゐる。

つまりこの作品は初め絢爛な、そしてそのためどこか淺薄なものであつた。さういふものを除き去つて、深さをもつた作品にはなつたが、それが自然にできたものでなしに、努力がなしたため、この地味な文章には、自分を制禦した努力によつて潤澤さを失ひ、乾いたのではなからうか。私はさういふ風に解釋したのである。

元來は、今後清算すべきものとして、あの形容句やルビにあらはれてゐるやうな趣味的なポーズをもつた作家と思ふが、さういふものは、一體どこからきてゐるか、私は、それを、この作者のわるい意味でのセンチメンタルの血に歸したい。センチメンタルは、ほんとに自分を裸にするものではない。そしてものごとを、ほんとに澄んだ眼で見させるものでもない。あのルビや形容句にあらはれてゐるセンチメンリズムが、この作品の本質をも、ほんとには徹底させてゐないのである。このセンチメンタルによつて、この作品は薄い皮を被つてゐる。この皮を、ほんとに突き破つたとき、この作家がほんとに立ちあがるときである。

この作品は、推敲したことで、力が弱まつてゐるかもしれない。(しかしもちろん推敲したことで、格段の傑れた作品となつたことには間違ひないが)しかし、この推敲の生活において、この作者は、自分の文學を、どれぐらゐ深めたかわからないと思ふ。すくなくとも、ここにひとつ文學的基礎をつくつたことは、確かなことだらうと思ふ。

私は、なんだか非難ばかり書いてゐるやうであるが、とにかく、これは批評の對象としてとりあげる氣になつた佳作なのである。

「妻」九十枚は、死なれた妻との六年間の生活の經緯を縷々として語つた作品である。心理的な私小説である。美穂といふその女にひきづり廻されてゆく男の氣持を書いたものである。

美穂といふ、その本質を描くことの、ちよつと至難な女が、ひとつの型にあてはめるやうなことなしに、なかなかよく描かれてゐる。美穂は、いはばがつしりした性格をもつてゐないことを性格としてゐるやうな女である。まだひとつの性格にまで結成されてゐない性格の閃めきいたものを、ふんだんにもつてゐる女である。つまり無意識で、無責任で、本能的に動く女である。遊ぶ相手としては魅力をもつたやうな非家庭的な女である。

かういふ女性のなかには、素直な男を感動させるやうな、比類のないこころの美くしさといふものが光つてゐるものである。それは無意識の愛らしさであり、純粋といふものの魅力である。いつでも自分以上の立派なことを平氣でいへる女だ。さういふ一種のかたことの立派さに、男がうたれてしまうとき、男は女をコントロールしてゆく力を完全に失つてしまうものだ。さういふ枠からはみだしてゆく妻に惱まされ、苦しませられる氣持が、ここには書いてある。

この二人の男女の關係といふものの祕密は、この作品のなかでは、徹底的には究明されてゐない。しかし一面的な解釋で、この關係を割りきつて解釋して、その眼でだけでこの作品を書いたなら、この作品は、これだけの厚みをもつことはできなかつたかもしれない。さういふ點、心理や動作を忠實に點檢内省して、それをここにならべてみせてくれたのは、この複雜な關係を描く上に成功してゐるといはなければならない。

しかしもう一歩すすめて、この複雜な運命的な關係といふものを、複雜にしてゐるのは、この小説のなかで、この男主人公が、ほんとに裸になつてゐないためではなからうかといふ

ことが考へられる。

男といふものが、もつと徹底して裸になるならば、このなかの複雜と見えるものが、實は案外、單純なものの、さまざまのあらはれにすぎないのではなからうか。しかしすくなくとも、この作品のなかでは、作者はそれに觸れてゐない。もしかすると故意かもしれないが、それに氣がつかない顏をしてゐる。

なぜ、この女があきらめられないか、女のなにが男をひきつけてゐるのであるか、そのいちばん底をなすものは、なにか單純なものに違ひない。それを作者がはつきりさせて、その上に、この複雜なものを生かしたならば、この作品のなんとない中途半端さは清算されて、もつと立派なものになつたに違ひないやうな氣がする。

ここに書かれてゐることだけから判斷するならば、私は、この男女關係を、こんな風に判斷する。つまりこの男主人公は、美穗のちよつと風變りな新鮮さにひかされたことがある。しかし一緒に暮してゐるうちに、どうしても運命的にぴつたりしない性質を發見する。しかしそれが、また妙に男の放蕩的な感情を刺戟するものをもつてゐる。男は女を素直に愛せな

くなつてゐるがしかし手離すのは惜しい。それは女が自分を離れてから幸福になるかもしれない、その可能性に對するしつとでもある。それから一度好きだといつたこの女に對して、お前を嫌ひだといふ矛盾することをいひきることは、この男の見榮坊が許さない。

しかしさういふさまざまの事情にもかかはらず、この愛せなくなつた女に、ほんとになんの未練もないなら、二人はあつさり別れられてゐた筈である。愛せない女と別れられないのは、そこになにか彼をひきつけるものがあるからだ。

それはなにか。ここに書かれてゐる範圍から私の理解するものは、それは女の肉體である。理屈を絶した肉體の魅力が、彼を彼女から離さない謎の根底をなしてゐると思ふ。實は彼は、もう彼女を愛してゐないのかもしれない。そしてできれば別れたいのかもしれない。さうして理性は、すべてさういふ方向に向いてゐるのかもしれない。しかしただひとつ、誠に莫迦々々しいことのやうではあるが、また實にリアリステイツクな理由、理屈を超越したはつきりとした未練、この女の肉體の獨自な魅力、根底的には、單純なさういふひとつのもののために男はひきづり廻されて、その上に築きあげたのが、この複雜な苦しさではなからうか。

もしもさうなら、そのことを、作者自身が、この作品の底で、もつと心得てゐてくれたなら、この作品は、もつとどつしりしたものになるだらうと私は思ふのだ。

私が、なぜこの作品の、そんな面に觸れたくなつたかといへば、この作者は、男のいろいろな氣持を、これだけ心理的に解析しながら、女のなかのなにが自分をひいてゐるかといふことを追求する點では、實に物足りない努力しか、すくなくとも作品のなかでは示してゐないからである。そしてそれが女の肉體であるといふことをあからさまにしないことと、この小說のなかの男女の會話で、殆んど女の方の言葉ばかり書いて、ひとには見られたくもきかれたくもないやうな、男の女への囁きの言葉を省いてゐることとが、なにか同じやうなポーズに身を包んだところから原因がきてゐるのではないかといふ風に考へられるのである、さういふ點、次作のために、私は、この作者の、もう一段の徹底を期待してやまないものである。

私は、とにかく、この新作家の登場を純文學の面目のために心丈夫に思ふものだ。最近、客觀リアリズム小說の隆盛は、文壇に個性の尊重を重要視しない風潮を生んでゐるが、文學は本來個性的なものでなければならない。さういふ點で、とにかくこの作品は懸命に自分を

主張する方向に向つてゐる。次に、さういふ風潮になつて以來、ひとびとが小說のなかで辿らうとする心理が、殆んど常識の類推を一歩もでなくなつてしまつたのが、今日の嘆かはしい狀態である。さういふ點でも、この作者は、ひとつの肉體に宿る心理を忠實に辿つてゐる。とにかく相當なものである。未熟である點は無視するわけにはゆかないが、しかし今日殆んど影をひそめてしまつたこのやうな作品に、久しぶりに接することのできたのは、私のよろこびであつた。

「文藝」の卷頭には、荒木巍氏の「黃色い手紙」といふ、いはゆる大陸ものが發表されてゐる。北京を舞臺にした、作者の紀行文とおぼしきものである。この作品を通してみた、この作者に、私は、どうしても厚意をおぼえることができなかつたのである。

この作者のなかには、どうもなにか低俗なものがある。しかもそれにもかかはらず、作者は、さういふ自分を、ちつとも考へないで、意識の上では、自分のインテリとしての高尙な面だけしか考へてゐない。もちろん低俗なものをもつてゐない人間といふものは、殆んどな

いといつてもよいかもしれない。しかし、それを意識し、それを昇華することによつて、人間は成長してゐるのだ。さういふ自分の面を全然見向かないといふことは、その低俗さを、妙になまな浮かしたものにしてゐる。この間隙を埋めようとしないそれが、この作者を少しも成長させないのである。修辭は、ただ平面的な文章を一層上手に書かせることだけにしか役立つてゐないのである。

さういふ嫌味なところを、具體的に、この作品についていふならば、たとへば、こんな文章がある。

「その機敏さ、と云つても、ただの機敏さではなく明るい物に拘るところのない敏捷さには、健吾は少々驚かされた。俗つぽく言へば「いかれた」形である」

ここで、この「いかれた」といふ言葉を使ふのはよい。なるほど「いかれた」といふ言葉が、もつとも適切に表現してくれるやうな感情は、今日のわれわれにはあるに違ひないのだ。しかしその上にくつつけてある「俗つぽく言へば」といふ言葉が嫌味なのである。「俗つぽく言へば」なんて斷り書を必要とするほど、この小説の全體は高尚ではないのである。もちろ

ん作者も、この小説が俗つぽくないからと思つて、ここで「俗つぽく」とことはり書きをしたのではなからうが、それならば、かういふ言ひ方は非常に生硬である。

この小説は、全體を通じて、大へんに俗つぽい小説である。そしてその俗つぽさに面白いところがあるのかもしれないが、どうも作者がいい氣になつてゐる小説だ。

私がいちばん不愉快に思つた場所は、天津の停車場で、支那のインテリ女性と北京で會合の約束のできたあとに書いてゐる、作者の次の言葉である。

「――これは仲々面白くなつて來たぞ――

彼は心中、作家的な欲望から、喜んだ。彼女と北京で交際したならば、どう轉ばうが、一篇の小説が何んの虚構をも案出する勞なく出來上る。殊に依つたら、筋書の波瀾に富んだ小説を地で行くことになるかも知れぬ」

これほど現代作家の墮落した面を露骨にだしてゐる言葉はない。こんな感慨の上にこそ「俗つぽく」とことはり書きをつけた方がいいのである。作家の興味が、こんな風に不眞面目に動いて、こんなところで小説を書いてゐるから、ほんとにひとのこころに迫るものが生れな

いのである。

しかも、その後、この紀行文のなかで、主人公が女性に向ける眼の動きには、その「作家的な欲望」が少しも感じられないのだ。さういふ緊張で對象に喰ひ入つてゐるとは思へないのである。單なる「男としての欲望」が活潑に動いてゐるのが見えるだけである。もちろん作家は、男としての欲望で女を見てはいけないなどといふことはない。男としての欲望で見ていいし、見るべきである。それにもかかはらず、作者は、なぜ自分のなかの、男としてのこころの動きを無視して「作家的な欲望」などといふ言葉を殊更使ふのであらうか、内省がなさすぎはしないか。

私は、この作者に、もつと自分の内に對しても、外に對しても、安易を捨てて、精神を高く燃えあがらしてくれることを熱望したいのである。

「早稲田文學」の今月の創作欄は、みんなよくない。ほんものがにじみだすにはもう一歩といふ作品ばかりである。

なかでとにかく力もこもつてゐるし、書いてゐることも、いちばん明瞭にわかるのは、林

健治郎氏の戯曲力である。ここに書いてゐる四氏のなかでは、いちばん年齢が上かもしれないが、この戯曲のなかには、なにかがでてゐる。その上この作者はこころの素値ないいひとで好感がもてた。しかしそれだけのよさでは、いい仕事をするための全部の力が備つてゐることにはならない。作者の素直な善良さが、この作品をいくぶん平板にしてゐる。嫌味な感じはなく、素直な熱心さに好感はもてるが、この眼はもつともまれる必要があると思ふ。

北原氏の作品の評がながくなつて、僅か三篇にしか觸れることができなかつた。その上に忙中の走り書なので、誠に意をつくしてゐないものである。氣にかかることが多いが將來いくらもまた語る機會はあると思ふのでこの走り書で一先づ責を果すことにする。

丹羽文雄の現狀

「鮎」「凡惱具足」などは、僅々三四年に著作集十六冊を世に示した丹羽文雄の全作品のなかでも、珠玉といふべき最高のものであるばかりでなく、昭和文壇を代表する佳品の列に加はへるべきものである。あの緊張した情熱から考へるならば、今度の「改造」に書いた「妻の作品」などは、はるかに、はるかに及ばない。一作品にうちこむ作者の情熱は、ずつとお粗末になつてゐる。

しかし職業に勵んでゐる最近の彼のものとしては、(私の讀んだ範圍では)、「霜の聲」に次ぐ佳品といつてよいと思ふ。「町内の風紀」に比べれば、はるかに材料を生かしてゐるし、文脈の格調も立て直つてゐる。「海の色」の安易なくりかへしに比べれば、やや清新な凝視と開

拓がある。また今までの彼から考へるならば、別な人生の面に眼を向けたことにも、この一作は今後の作家的觸手のひろがりに、新しい期待を抱かせる。さういふ點などからきはめて甘く採點するならば、私は、この作品を一應の佳品といひたい。

今月の諸家の作品のなかにならべて、月評的採點をすることにとどめるならば、私のいふことは以上に盡きる。しかし位置を代へて彼の作家としての發展といふ線の上に、この作品を立たせて眺めてみると、もう少し、この作品に立ちいつて、ここから丹羽文雄の現狀を抽きだしてみたい慾望を感じる。「町内の風紀」や「海の色」に比べれば、佳品であるだけ、彼の作家的難點も露骨にでてゐる。その難點を默つて通りすぎるには、私は彼の未來にかなり激しい情熱を感じてゐる。以下述べる苦言が、彼の作家的將來のために、ひとつの良藥の役割を演じることができるならば、ありがたいのである。彼の作品に對しては苛酷にならずにはゐられない友情と關心がいま私のこころには漲つてゐるのである。

彼の今までの作品には男女の愛慾を主題にしたものが多い。おそらく彼の環境が、彼に、

まづ愛慾を通して人生を眺めさせたのであらう。貧乏を通して人生に觸れた作家もゐるし、自然を通して人生を味つた詩人もゐるやうに、彼の眼は愛慾といふ窓から、人生に結びつけられた。しかも、このことは彼が作家であらうとしたために起つた事情ではない。むしろ單なる一人間としての彼の體驗した、もつとも切實な人生なのである。それ故、その世界に對する態度は單なる觀察ではなく、彼はそれを通じて人生を思索したのである。その意味から、彼の愛慾小說は、職業的作家が、奇異な材料をとりあげて讀者を驚かさうとする風な根膽からの取材とは、をのづから別箇のものである。むしろ彼の知つてゐる材料により、彼に人生を考へることを强ひた側面から、彼の人生觀、良心の告白、生きることを語つた作品である。彼の愛慾小說が廣く讀まれるだけの迫力をもつてゐたのは、取材の珍らしさではなく、そこで彼が人生について思索してゐたからである。奥深い人生を背負つてゐるからだ。

彼と相前後して出現した作家たちのなかに、彼的な愛慾の世界を描いた作家は、決してすくなくない。それにもかかはらず、特に彼のものが廣く、なぜ讀まれたかといへば、さういふ材料を書いた他の作家たちは、たださういふ材料の新鮮さを面白がつてゐただけでそこで

自分の問題を思索してゐないからである。普遍的な人生といふ背景に結びついてゐなかつたからである。しかるに丹羽文雄の場合には、かかる世界を描いたことは、材料が珍らしいために作家的觸手が動いたのではない。彼にとつては珍らしいも珍らしくないもない。そこが彼が身をもつて人生を生きた場所なのである。それ故、多くの作家が、新しい風俗への取材をねらつて同巧異曲の作品を示してゐるにもかかはらず、ひとり彼のもののみが高く存在してゐるのである。ひとを感動させ得る小説の根源に流れてゐるこの事情は、作家が膽に銘じておくべきことである。

このやうに、その出發においては、愛慾の世界は、彼が眺め、彼が思索を强ひられた人生そのものの姿であつたのだが、ひとたび、それが作品として世にでたとき、世のひとびとは誰の作品に對してもする樣に、丹羽文雄の小説に對しても、その作品が內包してゐる一般的なものよりも、むしろそのなかにある特殊なもの、異色あるものを眺めようとした。そして彼を新しきエロテイシズムの創造者と呼んだり、愛慾の作家と稱したりした。

彼は、かかる世評を耳にするまでは、自分は人生を書いてゐるといふことだけを信じてゐ

て、さういふ自分の特異さには氣づいてゐなかつたであらう。かかる世評を耳にして、彼は自分の特異さを、始めて意識したのである。世にでた作品は、今度は、それ自身の力をもつて作者に働きかけてくるのである。過去の作品は脱皮の形骸であると同時に、作者の未來を束縛する手枷足枷でもある。

もしも彼が自分の扱ふ世界の傾向的なのを意識したときに、作家として、もつと視野を開拓しなければいけないと反省したと想像してみるならば、彼は、そのとき、自分の描いてきたやうな人生の側面に比して、他の側面は手も足もでないほど知つてゐないといふことに氣づいたかもしれない。しかし實際は、案外單純に、十年の苦節が報いられた自分の描く人生の獨自さに滿足して、愛慾を通してみた人生そのものよりも、人生を見るひとつの窓であつた愛慾そのものへも興味が倍加したかもしれないのだ。私は彼の非常に素直な一面から（ひとびとは、このことにあまり觸れない）、さうも考へられる。とにかく、いづれにしろ、結果から見て、人生萬般を不平均に知つてゐたため、さういふ方向へ押しながされてゐるのは、彼の仕事が物語つてゐる。

かくして、彼は自分の獨自を意識したことによつて、今まで自分の眺めてきた世界を、單に人生としてみるよりも、特色ある人生として眺めるやうになつた。その上、今までは「人間の眼」で、そこをみつめてゐたのが、今度は「作家の眼」だけしか使はずにもそこを眺めるやうになつた。かつてはそこに人生そのものの姿を見てゐたことから、やがてはそこに單に小説の材料だけを見るやうにさへ變つた。ときには感動もなく、商賣のネタを、そこに漁つたことさへある。そのやうにして、いはゆる華々しい文壇的活躍の三四年をすごした。

そして世間は、彼に「鮎」や「凡惱具足」からは一歩もでてゐない十六冊の著作を書かせ、彼はそれを書くことで、文筆職人としての小説製作術といふものを體得し、今日動かしがたい確固たる地位を築いたのである。處女作「秋」が書かれてから十二年の歳月が流れてゐる。「鮎」は昭和七年の作である。

愛慾の世界を書きまくつた彼には、今日では、以前に比して、その世界を靜かに眺める餘裕ができた。もはやそこは自分が人生を思索する渦中の場所であるよりも、靜かで豐かな小

說の舞臺と變つた。そして作家として人生を見ることは、生涯の宿命として確立された。

もはや彼にとつては單なる愛慾の世界を描いてゐるだけで、人間としても、作家としても人生全般を探求するには、その窓が狹すぎるのである。彼の觸手は局限されてゐた世界から、人生の他の側面にも、徐々にのばされつつある。最近の「町内の風紀」「妻の作品」などは、新しい世界に向けられた彼の眼を感じさせるものである。そしてその意味からは、彼のこの傾向の助長されることを、私は極力願つてゐるものである。しかしこの開拓の方向に賛意を感じながらも、この開拓の態度には、いくぶんの不滿がある。

「鮎」や「凡惱具足」に比べて、この新しい人生に向つては、人間の誠意をつくして、その世界の人生的意義にぶつかつてゐないところがあるのである。「妻の作品」には、懸命に人生を考へようとする人間の態度が、作者の情熱のなかに宿つてゐない。登場する諸人物が對面してゐる人生問題に對して、作者は、ほんとにその問題を一緒に苦しんでゐないのである。登場人物の運命について、冷たい無關心しか示してゐないのである。材料が材料のままで、作者の思想のなかに消化されてゐないのである。愛慾を主題とした作品の場合とは、その一

作品の主題は、ほんの輕い氣持でとりあげたものの場合にも、そこは、彼か眞面目に人生を考へてきた世界であるために、その厚みが、作者の眠におのづと宿つてゐるのである。しかし、その世界では、思索を趣味として思索したのではなく、人生において、思索しなければならないところまで人間として追ひつめられ、思索に無精な彼も、それをしなければ自分が救はれないところまで立ちいたらせられてゐた。その眞劍さが、マンネリズムになつた作品のなかにも尾をひいてゐるのである。

しかし「妻の作品」には、さういふ人間的眞劍さが缺けてゐるのである。單に小說の材料としてしか、この內容は、作者の關心を呼んでゐないのである。

もちろん人生を小說の材料としてしか見られないことは、靑春の紀念塔的な作品を書き殘した以後においては當然なことである。そして一雜誌小說に自分の全力を傾けきれないのも仕方のないことであらう。それ故にこそ、深い意味をもつた靑春の紀念塔的な作品は、再び書けないのである。あの昔日の自由さは、作家としての自分を確立したときには失れてゐるのである。

作家を生涯の宿命とした人間が、人生を小説の無限の材料として眺め、そのやうな眼で見ることから逃れられないのは、彼に作家としての生活があり、その生活に眞劍である證據だ。さういふ點から「妻の作品」の主題といふものを、彼のなかの人間よりも作家がとりあげたことは當然である。ただ、この主題に對して思想することが缺けてゐるのである。そしてこの缺如は、彼の將來の發展のためには、重大な脫落だと私は信じるのである。

「妻の作品」において、その素材となつてゐる人生的問題に、あるひは登場人物の心理に、一應は立ち入つてゐるごとく見えながら、ほんとは立ち入つてゐないのである。眼に寫つたことを羅列した以上に、ここに描かれたこの人生に對して、作者の人間的なこころに火が燃えてゐないのである。この問題に對して作者自身が、痛切に考へさせられた形跡が見えないのである。それ故、この作品は、深く人生を背景として、その上にがつちりと立つてゐない。彼のとりあげようとした問題は、ひとが考へねばならないひとつの深刻な人生的問題であるにもかかはらず、この作品のなかでは、それが人生そのものの厚みをもつて、ひとに迫つて

こない。作者が、ほんとにこのなかに人生的な問題を痛感してゐるならば、それが中軸となつて、ここに描かれた人生の遠近法がはつきりとし、盛りあがつてくる力をもつてゐるべきである。しかるに、そのやうな實感の中軸がないため、作品の中心點は平俗な意味では明解でありながら、本質的にはぼやけてゐる。大切なことも、附隨的なことも、平凡に等距離におかれてしまつてゐるのである。單なる風景描寫としても遠近法がぼやけてしまつてゐるのは、作者が素材をならべただけで、精神をうちこんでゐないためである。

實際の作品に卽して、少し語ることにする。この作品が書かれねばならなかつた理由は、六歲の子供恭一の提出してゐる問題のなかにある。母親を父から奪つて、自分が獨占できない子供の惱みが主テーマである。

この作品が生き生きとした感動を呼び醒まし得ない根本的な弱點は、まづ子供が全く書けてゐないといふことである。子供そのものに少しも眼を向けず、單に子供の提出した問題だけを、子供からとりあげ、その問題を書くためにだけ子供を利用してゐるのである。子供は

問題を設定するための作者のロボットとなつてしまつてゐる。子供の提出した問題を扱ひながら、その子供を大膽に無視してしまつてゐる。そのために、子供の心理を描寫するやうな場合にも、ぼんやりした子供の感情を、すつかり大人の言葉に飜譯して書いてしまつてゐるため、讀者は、そこを讀んでも、六歳の子供のこころを描いたといふ大切な實感が胸に傳はつてこない。

この小說は、湖畔の溫泉宿に逗留してゐる母子のことから書きだされてゐるが、恭一が夜の空に見入つてゐる氣持が、次のやうに書かれてゐる。

「恭一は湖畔の二階から空を眺めてゐる內に、いかにもずうつと昔から、自分が生れるよりもずうつと昔から倦まず撓ゆまずかがやいてゐたであらう星の無關心なのに氣押されて、恐れと驚きの表情になつた」

かういふ恭一の氣持の表現をみて、ひとは、この背後に六歳の少年の肖像を描くことは不可能である。これに類似の、あるひはこれほどまで、まだはつきりした形をとらない、このやうは感情が、六歳の子供のなかにないとはいはない。しかしこのやうな表現では、「六歳」

といふことが、あまりに無視されてゐるではないか。これは早熟を表現したことにもならない。六歳の肉體とこころを無視してゐる。六歳といふ實感が、作者のなかに全くなく、提出してゐる問題の方にばかり眼が向いてしまつてゐるのである。しかし六歳の肉體とこころを描くことなしに、提出してゐる問題のみを、生き生きと迫らすことは不可能である。「まは、きつと京都へいつたぱぱのこと思つてんのね」とか「うちの前に自動車がとまつたから、ぱぱかと思つたんだけど、まあ、よかつた」などといふ恭一の會話にしても、意味だけは傳へ得てゐるにしても、六歳の會話として、躍如としたものはないのである。子供のこころに對して、ほんとの思ひやりがないため、言葉があまりに餘韻がなく、あけすけなのである。

ひとつひとつ例をあげてゐるとながくなるから省略するけれど、その他、子供の心理にかこつけて、無意識に、子供のことは思ひやらず、作者自身の實感を書いてゐるところなどもある。たとへば二頁八行目「しかし、こんな風に凹まされる苦味はしよつ中味つてゐるので、恭一はまた、大人のやうに不滿な言葉はのみこんでしまつた」これは、むしろ恭一がしよつ中味つてゐる氣持であるよりも作者自身が、その日常生活において、しよつ中味つてゐる氣

持なのであらう。きはめて概念的な心理描寫のなかに、このやうな具體的描寫がまじつてくると、水と油のやうに融合しないのである。

その上、いたるところに通俗小說のマンネリズム的な文章が忍びこんでゐる。たとへば一頁最後の行の「柔和な、厚味のある笑顏」などといふ表現にしても正確な像が浮んでこないのだ。通俗小說的な手法が、どのやうな弊害を生んでゐるかといへば、あまりにあらゆる場合に作者が登場してきて、なにもかもいつてしまふため、描かれた人生の含蓄といふものを、みんな殺してしまつてゐるのである。たとへば七頁目に、こんなところがある。「路子は起きていつた。恭一は誰からの電報か判つた。もつとも湯治中の路子に來る電報なれば、良人の光村にちがひなかつたけれど、恭一は、「ばばからよ」と敎へられるまでの時間をひやひやして待つた。父親からの電報は自分には前からわかつてゐたのだといふ氣が强くした。母親と二人でいつまでもこの宿にゐられる幸福を、父親が嫉んでゐるのだと思つた」大膽にいへば、こんな說明はなくてもよいのである。その前の方で、恭一の心理については、讀者は大體わかつてゐるのだし、またここで、こんなことを作者がいふよりは、いきなり、

「電報が參りましたので」
「ぱぱからよ」
「まま、かへるの」
としてしまつた方が、含蓄になりはしないか。通俗小説では、くどいほど説明しなければならないだらうが、ほんとの小説においては、なにもかもあけすけにいつてしまうことは、讀者の想像力の參加を許さず、却つて、そこに描かれる人生の奥行を淺くしてしまうのである。さういふ點、通俗小説の筆をとつてゐる丹羽文雄の場合、今後よほどの注意が必要だと私は思ふ。

六歳の子供の提出した問題が主テーマとなつてゐるといつたが、これはむしろ父親や母親に讀ませるべきものであり、父親や母親として考へるべき人生の問題である。もちろんここでも一應母親の考へるべき問題として提出されてゐる。しかし作者は、ほんとに母親の考へるべき問題として追求してゐるであらうか。確かに一應は追求してゐる。しかしそれが親味

に缺けてゐるため、皮相に落ちいつてゐることはないであらうか。たとへば母親の反省を、次のやうに書いてゐるところがある。

「恭一には乳母をつけ、主治醫をきめて、まづ頭で考へ出せる母性愛には何一つとして手落ちなく路子は育ましてきた。しかし母の愛情といふものは、理性だけでは十分でない。何かもつとほかにもやもやとした特殊な機能が含まつてゐるのではないだらうか。理智だけでは完全とは云ひきれない。ちよつと譜では捉へられないやうな、もつと他の世界があるのではないか」

かういふ端初は、もつと奥深く突込んでほしかつた。前のところでは、なにもかも、あけすけに書くことは奥行をなくすると書いたが、このやうな場所では、作者の思考と想像の翼を充分に伸ばして問題に當面してゐる母親のこころを、うんと堀りさげてほしいのである。

ここに書かれたやうな、ひとつの悲劇は、もちろん父親の惡意によつて惹起されたものではない。父親も確に子供を愛し、子供のことを考へてゐるに違ひない。さういふ意味では、このやうな父親は子供にどのやうな愛情と考へをもつてゐるかといふことを探求すること

は、ここに示された問題に對して、ひとびとが眞劍に思索んるためには、當然避けられないこととして浮びあがつてくるべきことである。しかしここに提出された問題について、作者は深くこころをゆすぶられて思考してゐないために、父親の子供に對する氣持を探ることは、極端に無視されてゐるのである。以上のやうな諸事情が、大へん作品の中軸をぼやかしてゐるのではなからうか。

單に、このテーマを書くために子供を無視したと書いたが、それではテーマの孕んでゐる問題に、作者は深い關心をもつてゐるかといへば、その點も、きはめて淡いのである。結局のところ、單純といへば、この作者は、この素材に對して、こいつは書けるなと思つて、それをすらすら書いただけなのではなからうか。

私は、彼が人生の新しい領野に眼を向けつつあることを、非常にうれしく思つてゐるのであるが、しかし、その新しい領野への切りこみ方が、單に目新しい材料といふことだけを見て、こいつは書けるなといふとびつき方にだけ終つてはいけない。

新しい領野に眼を向けるといふことは、材料の眼先きを代へるといふことではなくして、

人生の新しい問題に、新しく眞劍にぶつかつてゆくことを意味しなければならない。そしてそこに人生の深い問題を見出すか、あるひは激しい感動をこころに漲らすかして、新しい領野を開拓してゆかねばならぬ。新しい人生の側面に眼が向くといふことは、材料の開拓ではなく、人生に處してゐる人間としての思想の發展でなければならぬ。さういふ反省への出發とそ、この才能に惠まれた作家の將來を確立するものである。

田畑修一郎の孤獨性

妙子屋書房が刊行してゐる小雜誌に「文筆」といふのがある。先日、その雜誌が短篇特輯をしたとき、田畑君も短かいものを書いてゐた。題は忘れたが、地方の旅館に働いてゐるある板前の話だつた。作者の眼にいつくしみがこもつてゐて、行き屆いた肌理のこまかい、好ましい短篇であつた。僕は久しぶりに、忘れてゐた純文學の魅力に觸れた思ひで、自分の氣持まで澄んでくるのを感じた。

やつぱりいい作家だなと思つた。そして今まで、自分の氣持のなかで、なにか、このよき作家を閑却してゐたやうな氣がして、すまなく思つた。私は、彼のものを讀みかへしたくなり、この二三月、田畑君の作品に親しんで暮した。田畑君は、今月も三篇の作品を發表して

ゐる。「中央公論」の「黑白」と、「新潮」の「岩礁」、「新女苑」の「カンナ」どれも調べの高さを失つてゐないものだが、纖細な世界を描いて、鮮やかさのくつきりしてゐる點では、私は「岩礁」に、いちばん、こころ魅かれた。「カンナ」も、商品としても充分通用する美くしい作品だが、ただ田畑君のものにしては容易な書き方をしてゐて、そのためにあいまいなところがあるが、そのために少女小說好みの餘韻を生んでゐるともいへる。

今度、芥川賞の詮衡に當つて注目された創作集「鳥羽家の子供」は、今のところ、彼の唯一の創作集であるが、この創作集は、最近に私のこころを動かしたもののひとつといふことができる。

今日のやうな時勢のもとでは、彼の藝術は、華美な位置を占めることは困難であらう。しかし、このやうな時勢のもとにも、田畑君の藝術が、少しの妥協もなく、ちやんとした張りをもつて、ひそやかに、しかし嚴然と存在してゐることは、藝術のためにこころづよいことである。

しかし、田畑君の藝術が、ここで終るか、新しい發展を開拓するか、さういふ點からいふ

と、氏が對象としてゐる世界や、その年齢からも考へて、前號で所感を述べた中山義秀君同様、やはり轉換期の危機に立つてゐると思ふ。といふのは、今まで書いたものは、今までのものとして、充分價値のあるものだ。しかし、この世界にとどまり、この世界に生きてゐるだけでは、彼の今後に大きな仕事を期待することはできない。このままではいけない。變らなければいけない。しかし私が變るといふ意味は、黑が白になるといふことではない。黑が黑としての一層の大きさをもつことである。

田畑君が今日までに書いてきた小説は、大きな眼から見れば、誠實にひとつの觀念に憑かれた青年の誰もが、その青年時代に書き殘す手記である。信念生成の記錄である。ものを眺めるための地盤の建設である。さういふ意味からいふならば、私たちは、田畑君の今日までの仕事から、どんなひとたちにでも、是非よませたい小説を得たとはまだいへない。むしろ彼が今日までに書きつづけてきた手記によつて、ここにひとりの作家が立つてゐるといふことを確かに信じさせるといふことは容易でない。信じてよい信念生成の記錄を示したことは讀者の前に、その未來を約束したことである。

今や田畑君は小説家として出發しなければならない場所に立つてゐるといふことで、ひとつの轉機の前に立たされてゐると思ふ。

田畑君は、實に自分に落ちこみ、自分から拔けられないできた。外に眼が向いてゐるときでも、その向き方は外の方へ突つ走れないほど、內に氣をとられてゐる。その氣のとられ方は、健康な限度をもつてゐるよりも、ときには神經衰弱的でさへある。

脫れでようとするよりも、耐えようとする。さういふ場所で心境が育てられ、心境小說家にならねばならなかつた理由があるのであらう。さういふ人間は、常にひとつの不幸をもつてゐなければ生きられない。實際に不幸であるか、あるひは不幸を假設するか、身近かに、たえず不幸をもつてゐないと、緊張した精神をもつて、眼が銳く働かないのである。逆說的ないひ方かもしれぬが。不幸から脫れようとしながら、微妙に幸福をおそれる精神である。これがまたみづからの藝術の防衞の役割を演じる。作家性を守ることになる。これはもちろん無意識の操作だ。無意識の故に、不幸をある程度、誇張して信じることができる。ひとつ

の我がままともいへる。

かういふ事情は、芥川賞詮衡で、血縁の親しみをもつて田畑君を支持した佐藤春夫のなかにも、私は酷似したものを感じる。最近の佐藤氏には、私は、はつきり失望してゐる。しかし佐藤氏が、最近いい仕事ができなくなつたのは、おそらく幸福に暮してゐるためだと思ふ。すくなくとも、傑れた作品を書いた時分に比べて、家庭的にだけでも恵まれてゐるであらう。その上、佐藤氏には、もはや不幸を假設するだけの青春はない。不幸を探す太宰治に昔日の夢を呼びさまされるほど、佐藤氏は老けてゐる。

田畑君も、常にある程度、不幸を身近かにもつてゐないと書けないひとのやうな氣がする。さういふひとに共通した性格は、わがままであり、孤獨を常にみづから求めるといふことだ。そして、藝術が、さういふものの上に立つてゐるといふことは、それをきわめて純粹にしてゐると同時に小さくもしてゐる。深くこころにしみてくるものがあるにもかかはらず、讀者を、その世界に溺沒さすためには、どこか弱々しさが運命的にあるのだ。

不幸感が確かに今日の期待すべき田畑君を育てたと思ふ。しかし同時に、その不幸感を原

動力にしてゐることが、今後の田畑君の發展のためには、むしろ弱點になるのではないかと私は思ふ。

田畑君は、自分で自分を、自分以上にも自分以下にも見ないやうに、實に冷靜な努力をしてゐる。自分を決して自分以上に見まいとする着實さと、自分を決して自分以下に見まいとする自負、彼の小說の調べの高さは、そこからきてゐるやうに思ふ。

その點、自分の內面世界を描いて、田畑君ほどの、あいまいさのない正確な筆をもつてゐるひとは、今日、誠に稀だと私は信じる。さういふ點では、實に得がたい作家だといふことができる。さういふ筆は、自然の描寫の上でも、しばしば見事な光を放つてゐるのにぶつかる。ただ、この眼は敏感に輕々しく動き廻るやうなことはしないのである。ひとつところをじつと見る。そして決心がつくと、實に冷酷に突つぱなして書く。一種妖氣をもつた正確さで自分を書く。簡潔な筆で、しかも決して急所を脫がさないのは、このじつと見る力のためだと思ふ。じつと見てゐるうちに、見てる對象と自分の區別がぼやけてしまつて、なんのた

めになにを見てゐるのかわからなくなる。さういふ狀態のところで、田畑君は、しばしば獨白めいた言葉を感傷的に書きつらねてゐる。そしてそれがなかなかリリカルに軟骨の役目を演じて、小說の效果に役立つてゐる。

無責任に筆の動いてしまはないところに、田畑君の小說の重厚さは生れてゐる。しかし今後、もつと視野の廣い世界を描くためには、もう少し勢ひのあまつたやうな柔軟な運筆もあつてもいいのではないだらうか。それが彼の小說の骨を、もうむしばむことはないだけ、彼の小說の骨はもはや確かになつてゐると私は思つてゐる。いつか「早稻田文學」に書いてゐた子供の遠足についてゆく小說を、今、思ひだしたが、あれなどは、作者自身、さういふことに氣づいて、書けない苦しさから思ひついた筆法だつたのではなからうか。

田畑君の小說には、しばしば田畑君らしい靑年が、憂鬱な不幸な顏をして登場してくるのに出會ふ。そしてその靑年をめぐつて、いろいろな人間がでてくる。

さういふ小說のなかで、いつも私が、いちばん厚意がもてないのはその田畑君らしき靑年

である。そしてそれ以外の人間の大部分には、いつも常に厚意を感じるのである。さういふ點でも、私は、この作者に敬意を感じたのである。

この主人公は、決して讀者に訴へない。それは作者が訴へさせないのかもしれない。そのためか、この主人公の不幸や憂鬱が、その深い理由が、讀者には少しもわからない。もちろん育つた環境に對する切なさなどといふものは充分に書かれてゐるし、さういふものが、どんなに運命的な根深さをもつてゐるかといふことは、私は自分の體驗でも身にしみてゐる。それにもかかはらず、讀者の方では、この主人公の氣持がわからないといふよりは、しばしば本人のちよつとした氣持のもちよう、努力の仕方で、この不幸はなくなるといふ氣がしてくるのである。

といふのは、彼をめぐる周圍のひとたちが實にいいひとたちに書けてゐるのである。多くの場合、自分らしき人間の不幸を描く場合には、自己辯護をすることによつて、周圍の人間の憎らしさ、ばからしさを描くものだ。しかしそれかといつて田畑君は、決して周圍の人間の賢明さ立派さを描いてゐるのでもない。ただ自分をできるだけ正確に書こうとするやうに、

周圍の人間も正確に書いてゐる。さういふことは、できさうで、なかなかできないことは、作者がどんな情熱の故に、それを書かねばならなかつたかを理解するならわかるであらう。

讀んでゐて、私は主人公が嫌ひになる、といふのは作者が主人公の不幸の原因を、周圍の理由にしないで、主人公自身の內部に、その理由を探さうとしてゐながら、主人公の自己嫌惡に、はなはだ中途半端なところがあるからだ。極端にいふならば、趣味的にさへ見えることがあるからである。

もしも作者が、この主人公に徹底した憎しみをもち、しかもその主人公を書かねばゐられない愛情を燃えたたせてゐるのなら、讀者は逆に、その主人公を愛さねばならなくなるであらう。

この主人公の不幸は、わがままを大きな原因としてゐないか。もちろん作者もさういふ面に觸れてはゐる。しかしなぜか、そこに切りこまないで、それを遠卷きにしてゐる感じがするのだ。

そこにくると作者は、實に冷たく讀者の前に立ちふさがつて、主人公の姿をかくしてしま

うが、私にはそれがもの足りないのである。

しかし、もしかすると、そこには切りこむべきものはないのかもしれない。それだつたなら、もう、この世界に別れを告げてほしい。

この高い調べと確かな筆をもつて、新しい出發をしてほしい。

とうとう孤獨性の解剖までいかないうちに、枚數がなくなり、走り書きで支離滅裂だが、私は、この作家の立ちあがることを、切望するもののひとりだといふことをいひたいのである。

その他、坂口安吾氏の「吹雪物語」には、もつと正確さがほしいと思つたし、澁川驍氏の「龍源寺」には、もつと愛情がほしいと思つた。そして「般若」の秋山正香氏には、もつと精密さの加つてくる將來を待ちたいと思つた。雜誌の小說で、あまり評判にならなかつたものでは、「文藝」九月號の壺井榮氏の「大根の葉」を、このごろもつとも好ましいものと思つた。女のよさが生きてゐる。

中山義秀の新しき出發に寄す

「ながい苦難の道を歩いて、遂に彼は自分の鑛脈を堀りあて、自分の作家道を確立したのは中山義秀である。僕は中山氏の「榮耀」を讀んだ日には、ちよつと興奮して、この作家も遂に立ちあがつたといふ氣持をつよくした。次に「厚物咲」を讀んだときには、僕の氣持は一層確實なものとなり、この作家への讃辭を書きたいと思つた」

本誌七月號の時評のなかに書いた、この文章に嘘はないが、いくぶんの誇張がある。これらの作品に對して、「鑛脈を堀りあてた」とか、「作家道を確立した」とかいふ言葉は、書きながら、少しつよすぎるやうな氣持がしたが、私は、さういふ言葉を使はなければゐられないほど、この氏の精進の結晶に敬意を感じた。といふよりは氏のながい作家修業の來し方に

感慨をおぼえたといふ方が適切かもしれぬ。遂に立ちあがつたといふ感銘を受けたのである。もちろん文壇の本年度上半期の第一等の佳作といつてよい作品である。今度の「藁」も讀みごたへのあるものだ。

それにもかかはらず、私が、自分の讃辭を、いくぶんの誇張といふのは、これらの三作によつて、氏の作家的前途が洋々とひらけてきたとは思へなかつたからである。この作品はいい、しかしそれは氏の將來への大きな期待といふものには、すくなくとも僕のなかでは結びついてゐない。むしろ追ひつめられ、追ひつめられた行きづまりの上に咲きでた佳篇だと思つてゐる。これらの作品が、道を切り拓いて到着した地點には、新しく大きな出發が孕まれてゐない。この道は行き詰つてゐる。今のところ、私には、どうしても、さう見える。

前の文章で、私の眼に寫つた、さういふ半面には、全然觸れなかつたことに、私は、自分の讃辭に、いくぶんの誇張を感じてゐる理由がある。そしてそれは必要な誇張だと思つてゐた。といふのはとにかく、この仕事は一應高く評價されなければならない。それだけの價値を充分もつたものだ。もしも、この仕事が高く評價されないやうなことがあつたなら、それ

は作家にとつて、あまりにみじめすぎることではないか。（しかしそんな氣持は、氏のいはゆる苦節十年を遠目ながら見てきた私の甘い感傷かもしれないが）

文壇の評價は、やはり公平である。氏の作品は大きな反響を呼んだ。その上、今日、芥川賞の榮譽を與へられたことを知つた。作者を元氣づけることもできたし、公平な評價も得たわけである。これ以上つけ加へるべき讃辭は、もはや、私のなかには、なにも殘つてゐない。私は、安心してむしろ觸れなかつた半面について一言しなければならない。

始めて「榮耀」（文藝二月　）を讀んだとき、なんといつたらよいか、私は一種の人間的實感のしみてゐるのに打たれた。しかもそれが今までの氏の作品とは、がらつと變つた厚みをもつてゐる。しかしそれは心理的解析力とか深い人間的把握力とか教養のしみた文學的觀察力とか、なにかしら、そのやうな才能の豐饒さによつて、キリツと切りこみ築きあげた、あの氾濫する豐富さのそれとは、どこか違つたものである。いはば年齡が身につけた常識を氏は最近の三作で、かなり十二分に生かしてゐる。その生かしたことからきてゐる、一種の人

間的厚みである。氏の作品が與へる感動は、作品としての出來榮えの素晴らしさよりも、人間の「運命」についての、氏の常識的判斷が、その圓熟の故に、ひとを納得させる力を潜ませたところからくる。

しかし圓熟した常識の提示だけでは、藝術は生れない。ひとのこころに傳つてくる情感の燃燒がなければならない。もちろんここにも、さういふ情熱は燃えてゐる。

しかし、その情熱は、かならずしも激しく人間探求、人生發掘の方にだけ純一には向いてゐないやうだ。むしろどうにかして傑作を書きたいといふ一種の熱病がつきまとつてゐるのだ。その熱病が、作品にチラチラ顔をあらはすのは作者の氣の弱さからきてゐるところもあるであらう。しかし同時に、その熱病が、これらの作品のために、それをまとめる一種の額縁の役割を演じてゐることも事實だ。つまり適當に、あるひは自分に必要なやうに人物を處理してゐるのである。同時にその熱病のために、觀察に、圓熟した常識以上の柔軟な理解の餘裕も失せてゐる。その餘裕の失はれてゐることが、これらの作品の緊密感を形成し、魅力とはなつてゐるが、それが魅力となつてゐることに、將來の發展の土臺としての、これらの

作品の脆弱さの原因もある。

餘裕がないといふことは、これらの作品に對する作者の力み方が、あまりに悲愴な風貌をもつてゐるといふことだ。その悲愴は、人間探求の方によりも、傑作熱望の方に向いてゐる。作家として苦難の道を歩いてきた辛さが露骨にですぎてゐるのである。ぎりぎりのところまで追ひつめられた悲鳴に似たものが、このなかにはこもつてゐる。「これでいけなければ、俺には、もう小説は書けん」さういふ力み方がこの小説の一種の切迫感をつくつてゐるやうに思ふ。そしてさういふところまで追ひつめつてゐた中山氏に、私の頭はさがる思ひがしたのである。

しかし苦難の道の報ひられた今日、私が、まづ、なによりも中山氏にいひたいことは、このやうな餘裕のなさから自分を救ひだすことだ。今や、さういふ餘裕のなさから、自分を救ひだせる地點に立つてゐる。そして救ひだした自分は、今までより、かならず精神の高い位置に立つ。息切れする一歩手前で、ものを書くやうなことをしないですむ。そしてそこから前途は切りひらかれるであらう。

「榮耀」が發表されたとき、大體、時評が一致して指適した缺點は最後の附け足しがいけないといふことであつた。宇野浩二氏は今度の「藁」の最後についても、さういふことをいつてゐるが（「文藝」昭和十三年 九月號座談會參照）私も同じ氣持がする。ただ「藁」の場合は、あのやうにまで盛りあげてくるための幅のある盛りあがり方が足りなかつたので、瀧井孝作の言葉を借りれば、その點、「藁」も「榮耀」も材料の消化が足りないといへるが、「藁」が描き足りないといふのなら、「榮耀」は書き方がずれてしまつたために、最後に附け加へた、作者のあの感情だけが、どうしても作品に盛りこめず、作品からはみだしてしまつたのだらうと思ふ。しかもあれを書かないことにば、あの小說はあまりに作者に味けない。

「榮耀」を、もしも、このままの作品として、最後だけ切りとられてあつたならば、ひとびとは、なんといふであらう。ここに描かれた、このひとつの運命のしめくくりとしては、最後があまりに、はかなく弱いのである。この最後は、作者も、ちよつともてあましてゐる。うまくたちきれてゐないのである。うまくたちきれなかつたのは、書こうとしたことと書い

たこととが、ずれてゐるからだと私は思つてゐる。

つまり、ひとびとが駄足といつてゐる最後の一頁に書いた文章のなかにこめられてゐる感情内容といふものは、作者が是非書きたかつたものに違ひないのだ。ここに書いた萬里子の印象といふものは作者が萬里子から受けた、もつともつよいはつきりした印象である。しかも作者の幻影のなかに殘つてゐる。この萬里子の姿こそ、作者が彼女の運命を描かうとした情熱を燃えたたせるために、きはめて大きな根據をなしてゐるのかもしれない。讀者は、このひとりの女の生涯を讀み終つて、作者とともに、「萬里子にたいする測隱の心さへ湧いて」こなければいけないのだ。つまり、最後に附加した、萬里子からけ受た印象は、作者にとつては書かずにはゐられない重要なものである。

この作品の失敗は、この重要な感情が、構成された筋のなかに混然と融けこまないで、それだけが溶解しないままに小説からはみだしてしまつたことである。萬里子の魅力を、もつと惣れぼれと、彼女の生涯のあらゆる場面に生かさねばならなかつたのだ。それにもかかはらず、構成された筋のなかでは、作者は、あまりに冷靜に、萬里子の運命の語り手となり解

釋者とだけなつてしまつたことが、私のいふ書こうとしたこと、書かれたことが、ずれてゐるといふ意味である。これは氣の弱さかもしれない。しかし餘裕のなさからもきてゐると思ふ。

片岡鐵兵氏は「文藝」九月號で、中山氏を次のやうに評してゐる。「臺」を讀んで、「以前分らなかつ弱點の由來が私に會得出來た。それは中山君に或る臆病があつたのだといふことなのだ。中山君はその臆病を意識してはゐなかつた。しかし、それは自然、素材の構成で、部分々々の採り上げ方の不均衡となつて表れざるを得なかつたのだ。氣が弱かつたのである。この種の作者には、外部から自信を植えつけてやるのが何よりも必要だらう。彼は天狗になればなるほど、本來の面目を發揮する。無用の卑下や無用の誇張をやめて、純粹なるものを表現するやうになる。」

これは、なかなかいたはりのこもつた言葉ではあるが、私には、どうもいひ方が淺く見えて仕方がない。私は、むしろ臆病こそ氏の眞情だつたし、その臆病と自信のなさのために、

氏が、この十年に腹のなかに貯へたものこそ、氏の今日の作品の厚みになつてゐるのではないかと思ふ。

中山氏は、最近の三作で、多く世間から理解されなかつた人間への理解を書いてゐる。かういふ理解の深まりは、氏が、みづからの臆病のために、自分を充分發揮できなかつた苦しみのなかで養はれたものだと私は思つてゐる。しかし、さういふ人間への氏の愛情の示しかたは、その人物たちに對して、讀者に微妙に同情を强要してゐるところがある。かういふところに、氏のさびしがりやが顔をのぞかしてゐるが、かういふ同情の强ひ方には、世間に對する一種の甘つたれがある。むしろ孤獨でゐられない臆病さからくる甘つたれを捨てて、もつとじつと耐える力を、もつとこころの豐かさのなかに捕へ得るならば、おそらく氏の作品は、一層の深い清澄を加へるだらうと私は信じてゐる。

これらの三作の背後に立つてゐる中山氏のこころといふものは、一種の詠嘆家である。そして人間の生涯といふものを、きはめて常識的に、すべて運命的と見てゐる。性格の宿命と

いふものを書いてゐる。しかしここではまだ、その性格の宿命を堀りさげるよりも、性格の經歷の羅列の方に、作品の重厚さを任せてしまつてゐる。作者は、性格の宿命の探求家であるよりも、性格の宿命の傍觀者である。もしも、この作者が、この傍觀者の道を辿るのなら私はこの作者にもつと描寫小說を書くことを望みたい。それは作者が、ここで試みてゐる技法よりは、はるかに苦しい技法かもしれぬ。しかしそれが氏の世界を廣く切りひらいてゆくためのひとつの重要な方向ではないかと私は思つてゐる。

いろいろ非難を書いてしまつたが、この作者が、どんな場合にも大地に足をじつくりつけて、上づらない大きい仕事をされることをこころから祈つて筆をおく。

十和田操について

一

本誌に四ケ月にわたつて連載された十和田操君の「屋根裏出身」が先月號で完結した。僕は、ここ四ケ月は、本誌を受取るごとに、この小說を、いつも一番先によんだ。大へんたのしい小說であつた。僕は十和田君が好きである。ひとを親しい氣持にさせないではおかないものをもつてゐる。その上、なにか獨自なものをもつてゐる。僕は未だそれがどうもはつきりとつかめないでゐるが、そのことは同時に、十和田君の方でも、まだほんとに彼の獨自の本領を發揮した仕事をしてゐないためではなからうかとも思ふのだ。

十和田君の今まで書いた、いろんな文章のなかで、彼のもつてゐるいろいろないいものがもつとも結晶した美くしい姿をしてあらはれてゐるのは、彼の短篇集「判任官の子」の後書だと僕は思つてゐる。十和田君のことを考へてゐると、いつも印象鮮明に頭に浮んでくるのは、あの愛兒伸坊に與へて書いた「後書」である。十和田君を知るのに、實に適切な短文である。彼を紹介するためには、その代表作の筋を語つたり、小說の一節を引用したりするよりも、比較的、讀者の眼に觸れる機會がすくなかつただらうと思はれる、この短文を示したい。

「この御本を伸坊にも贈る。

これは父公の小說が初めて御本になつた記念だ。父公は大きなくせに嬉しがつてゐる。父公が子供のとき伸坊のお祖父ちやんは未だ判任官のお役人だつた。父公は大きくなつて小說を書く人になつたが、父公の考へてゐる小說は仲々人が賛成しないから父公は未だ判任官にもなれない。それで伸坊がおとなしく御飯を食べてゐるところや、夕御飯を食べながらお腹が一杯になるとお箸とお茶碗を持つたまま食卓にもたれて小さいワンワンのやうに居睡りし

出すところなど見ると父公は何んだか悲しくなつて大人のくせに涙が浮んで來る。しかし父公は決して溜息はつかない。父公の魂は涙がくつついてゐても強いから大丈夫だ。伸坊は大きくなつたら潜水艦の水兵さんになると言つたらう。父公はそれまでにこの魂で立派な潜水艦をこしらへておかう。

伸坊は未だ六つだからこの御本は讀めないが、今に伸坊が大きくなつて父公がお爺ちやんになつたら、必つと讀めば讀む程大切な御本になるだらうと思ふ」

これは、いい意味でも、わるい意味でも、有島武郎の子供に與へた文章とも、三木清のそれとも、森山啓のそれとも違ふ。そしてかういふ抵抗のない愛情の對象に對してしやべつてゐるとき、十和田君の純情が實によくでてゐる。

短篇集「判任官の子」のなかに、「海豚提灯と犬張子」といふのがある。失業した男の一日が、ここには描かれてゐるが、このなかに新宿で出會つたむく犬との會話がある。この抵抗しない相手との會話も、十和田君の書いた文章を通じての傑出したものだと僕は思つてゐるがこのふたつの文章に描かれた世界には、ともに不遇のさびしさがしみとほつてゐる。しか

もそれにもかかはらず、こころを溫かにもちたえて、のびのびとした、ひとの氣持をじめつくものから救つてくれるものがある。十和田君が自分を愛してゐる姿に、環境にうちかつてゆこうとする、自分で自分にうちかつてゆかうとするもの、意志的な眞面目さが針棒となつてゐるからだ。「羽蒲團」のやうな抵抗力をもつた對象との間の心理的なものを扱つた作品、かういふ作品は、僕はそんなに高く買へないのである。前のやうな自由自在な筆致に比べて、いかにも下手糞で中途半端に見える。くつきりと浮びあがつてきて、ひとのこころにしみてゆくものに缺けてゐるのだ。

おそらく彼は、ひとと爭つて苦しんだり、反省したりするよりは、もつとひとを避けて、いろんなことにじつと耐える修練の方を積んだひとなのであらう。「判任官の子」は、この作家のさういふ修練の樂屋を舞臺にした小説であり、氏の代表作といつてもよいものと思ふ。ただこの作品の場合にもなほ、彼の多くの作品と同樣に、ひとつの鑛脈が彼のなかにあるといふことを感じさせながら、自分で自分の鑛脈を堀りあてきつてゐないもの足りなさが殘るのだ。折角の本領の上に、はつきり立ちきつてゐないはかなさだ。僕は、この作家が、もつ

とぎりぎりのところまできて、このなにか模策的なもやもやと晴れきらないものがふつきれて、立ちあがる日をほんとに期待してゐるのだ。

二

「屋根裏出身」も僕は愛讀したし、この作品の連載を知つたとき、今度こそ十和田君はやるだらうとたのしみにしてゐた。しかし結果は、この作品もまだ十和田君の眞骨頂を發揮してゐないと僕は思ふ。彼は、もつと才能をもつた作家である。「屋根裏出身」でも彼の異色ある才能はよくわかるし、もつとくだらない作家の認められてゐる今日、彼の才能はもつと認められてよいと思ふのであるが、しかしその異色性の故に、彼の才能にひとびとの注目がなじめないのかとも思ふ。とにかく彼の異色性は、まだ戸惑ひしてゐるのだ。その點では、彼はまだもつとその苦難な道を歩かなければならないかもしれないが、かならず自分の才能を信じて、その苦難に耐えてほしい。僕が、さういふ氣持をもつて、ひそかに期待してゐる作家に、もうひとり本誌の執筆家で今官一君がゐる。またながい苦難の道を歩いて、遂に彼は自

分の鑛脈を堀りあて、自分の作家道を確立したのは中山義秀君である。僕は中山君の「榮耀」（「文藝」所載）をよんだ日には、ちよつと興奮して、この作家も遂に立ちあがつたといふ氣持をつよくした。次に「厚物咲」（「文學界」所載）をよんだときは、僕の氣持は一層確實なものとなり、この作家への讃辭を書きたいと思つてゐたのだが、機會を失したので、ここに記しておく。

今君や十和田君は、まだ中山君のやうな、みづからの作家的地位を築くだけの、自分を堀りあてた仕事をしてゐない。「屋根裏出身」にしても、愛すべき世界が描かれ、彼の異色性は充分に察知される作品ではあるが、まだ彼のほんとの力は發揮されてゐないのである。

この作品は四回にわけられてゐるが、それぞれの章に、それぞれのよさがあるが、全體を通じて比較してみると、回を追ふごとに、作品の印象が、だんだん不鮮明になつてきてゐるのだ。つまり次第に迫力を加へて盛りあがつてきてゐるといふよりは、次第に力がよわくなつて龍頭蛇尾に終つてゐるのだ。最終回がいちばんいけない。最初の第一回が、いちばんはりきつてゐる。一種の魅惑される興奮のなかに、この屋根裏の世界は描かれてゐる。この調

子でいつたなら、これは素晴らしいと實際、僕は、そのとき思つた。古い日記帳の部分になつてからも、この日記帳は、なかなか面白いと思つたが、僕は面白いと思ひながら、また別な一面では、このやうな形式にしてしまつたことは、作者がどうやら、この材料をすこしもてあましてゐるなといふ風に考へたのである。とにかく、この小説の主人公とみられる和良さんが、もう少しがつしりとこの小説の構成の中央に立つてゐてほしい。そして和良さんの眼を通して、作者の鋭く深い批判力が全體をひきしめてほしい。

十和田君は實際いいひとだ。しかしここでは十和田君はいいひとすぎるといひたい。けれどそれはもつと意地わるい眼を働かさなければいけないといふことではない。といふのは彼の異色性を築いてゐる大切な要素として、いいひとだといふ、あのすつきりした温かい眼が重要なものだと僕は考へるからである。だから小説家は、もつと意地わるい眼を働かせろなどといふことはいはない。むしろ十和田君の眼のあたたかさにもつと清澄な深さを要求したいのである。たとへば井伏鱒二は、それをしつかりともつてゐる。しかし彼のユーモアには、まだほんとに清澄な滋味をたたえた深い味ひが足りない。

そのために調子に乘りすぎてゐるやうな文章では、淺い感じだけか妙に浮きあがつてしまうことがある。しかも淺い感じが浮きあがつてしまつてゐるやうなときでも、外のひとならやりきれない俗つぽい淺薄な感じを與へるやうなときでも、十和田君は、決して不快感を與へない。むしろ清潔な微笑を感じさせてくれるのは、僕は素質のひかりだと思つてゐる。しかしさういふときは騷音がまじつてゐる感じで、すんだひびきをこちらの胸に傳へてくる力には缺けてゐるのである。さういふものが、もつと清澄な深さを捕へ得るやうなつきつめ方に彼の氣持がつよく向いてほしいと思ふのである。それには自分の素質に甘えてはならない。

彼は「月刊文章」の六月號に、「惡文の矯正法」といふ珍奇な題(おそらく編輯部の出題ではあらうが)の短文を書いてゐる。これもおそらく十和田君でなければなければ書けないなあと思はせる、ひとを喰つた、しかもそこにすこしも邪氣の感じられない文章であるが、僕は、彼がかういふ面白さのなかにおぼれてしまふことを、いちばんおそれたいのである。『その昔同人雜誌「白樺」に據つて貴族流の惡文を揮つてゐた志賀直哉氏や武者小路實篤氏は今日、志賀氏は小說の神樣となり武者小路氏同じく不動明王となつた。又「文藝時代」に

據つて新感覺派初期の强文を揮つた作家達も同樣、中で横光利一氏は一時は文學の神樣と祭られたし、川端康成氏は今尙小說の菩薩樣にましましてゐる。』

これは前記の文章の一節であり、よんでちよつと面白いが、かういふ思ひつきであること以外に內容のないやうな文章に自分の才能を浪費しないでほしいのである。それがこの異才を大きく成長させる道だと思ふ。

三

谷川徹三氏は、かつて東朝紙上の「文藝時評」で十和田君の「平時の秋」(三田文學所載)をよんだ印象を次のやうにいつてゐる。

隱岐和一氏の「早稻田文學」に發表された「西陣」に比べて、「平時の秋」は「もつと獨自なものがある。(中略)デツサンは確實とはいへないが、構圖と線には面白みがある。稚拙な味がある。」かういふ言葉だけでは、かたづけきれない內容の厚みには確かに缺けてゐる。「構圖と線の面白み」といふ面白さ、つまり十和田君の小說の面白さといふものは、一種ス

タイルのくづれた形にあると思つてゐる。しかしそれがほんとに確實なデツサンの描ける修練をつんだ上でくづしてきた形といふよりも、最初から、そのやうなきびしい修練の方に眼を向けないで、くづれた形の方にばかり眼を向けて書きつづけてきたやうなよわさが感じられるのである。らくがき的な文章の線の面白さに、まだゆらぎない骨骼がないやうに思ふのである。そのために清澄な深さといふものが湧きあがつてこないのではないかと思ふ。

十和田君とは全然違つた作家ではあるが、たとへば石川淳なんかも形をくづした作家である。しかしそれはもつと確實なデツサンをもつてゐるやうに思ふ。僕は石川淳の小說を始めてよんだとき、このひとはずゐぶんフランスの小說をよくよんだひとに違ひないといふことが、最初につよく感じられた。さういふねられた味があるのである。

十和田君は、もつとねられぬかれるためには、うんと高い目標をおいて、安易に自分のなかで書くたのしさを味つてゐないで、苦しいつきつめ方をすべきではないかと思ふ。珍重すべき才能はであるがまだ磨きがかかつてゐない。なにか不滿ばかり書いてしまつた結果になつたが、僕はかねて、ひそかにこの作家の獨自性を愛し、この作家の立ちあがることと、も

つと認められるべきことを願つてゐたので、「屋根裏出身」完結を機會に、この時評を一回さいて苦言を呈するのである。

火野葦平について

昭和十三年の春、火野葦平は、鶴田知也が芥川賞參考カードに、その名を記したことから審査員たちの知るところとなり、遂に「糞尿譚」によつて、芥川賞を獲得した。それまで彼は、九州の一同人雜誌の無名作家にすぎなかつたのであるから、この新人作家が中央文壇に登場してから、まだ一年の歳月さへ經てゐない。それにもかかはらず、私は今、彼の文學を論じるに當つて、戰爭のことを書いてゐる彼のことを考へると、なにか手の屆かないところにあるものに觸れてゆかなければならないやうな困難を感じてゐる。

それは、彼が、あまりに異常な人氣のなかにあるといふことのためではない。異常な人氣を捲きおこした「麥と兵隊」や「土と兵隊」の作者が、彼だからである。つまり火野葦平と

いふ一作家の心理のなかには、私の辿れる身近かなものが　たくさんあるのだが、「麥と兵隊」や「土と兵隊」は、私の生きてきた人生だけをもつては、今、辿りきれない異常な事實の世界を示してゐる。それ故、示されただけの事實を、じつと見て、ここから戰爭を知るといふことの方が、大きな感動になつてゐるのである。この作品のなかでは、火野葦平といふ人間に對する興味よりも、戰爭の事實の活寫といふことの方が、比較にならないぐらゐ、大きな魅力になつてゐる。

私が、ここで論じたいと思つてゐるのは火野葦平であるが、今日、世間的に大きな存在となつたのは火野葦平ではなく、「麥と兵隊」と「土と兵隊」である。火野葦平の存在が大きく見えるのは、これらの作品の代名詞としてである。そしてこれらの作品が大きな存在であるのは、今のところ、不朽の傑作小說としてではなく、國民全般が、もつとも深い關心をもつてゐる戰爭といふ事實についての、今日までにおける、もつとも傑れた報導としてである。それ故、これらの作品の異常な反響は、火野葦平が今日の文壇において、比較を絕した天才作家であるためではなく、戰爭の事實を知りたいといふ、國民全般の要求の反映と見る方が

至當である。

しかし、このことは火野葦平を無能作家であるといふことではない。私は「麥と兵隊」や「土と兵隊」の、今日與へられた位置の根據についていつてゐるのである。さういふ國民全般の要求と結びつかなかつたならば、これらの作品が、今日示されたもの以上の傑作であつても、今日受けてゐるだけの反響は得られなかつたであらう。しかし、さういふ反響の得られなかつた場合にも、これらの作品の文學的價値は、それによつて減少することはない。ただ、ここでは反響が文學的價値のためばかりではないといふことをいひたいのだ。

戰爭の魅力ではなく火野葦平の作家としての魅力が、どれだけひとびとを捕へるかは、凱旋した彼が、われわれの住んでゐる平常な人生を扱つた作品を、世に示すまではわからないことである。しかも彼が、さういふ仕事を、するかしないかさへも、今ではわからないのである。

とにかく今日における火野葦平は、これらの戰爭文學の作者として大きな存在なのであつて、これらの作品は、火野葦平といふ偉大な作家の一作品にすぎないといふ狀態にはまだな

つてゐない。そしてこれらの作品が大きな存在となつたのは、戰爭の事實を知りたいといふ國民全般の要求の力である。

私が今このやうなことから書きださねばならない氣持になつたのは、私が今ここで對象としよやとしてゐるものが、「麥と兵隊」や「土と兵隊」の代名詞としての火野葦平ではなく、人間火野葦平といふひとりの作家だといふことをいひたいためである。

戰爭といふ、われわれの知らない事實の世界に飛びこんでいつてしまつた火野葦平のなかから火野葦平を見失はないためには、それ以前の彼の五篇の作品が、重要な意味をもつてくる。これらは異常な事實の衝擊によつて生れたものではなく、彼の日常生活から生れた作品だからである。もちろんこれらの五篇の作品のなかに流れてゐるこの作者の血は、確かに彼の戰爭小說のなかにも流れてゐる。これらの兩方の作を對比してみると、確かに戰爭は彼を變へてゐる。しかし彼の本質は、戰爭の體驗さへ、それを變へてゐないといふこともわかるのである。

「糞尿譚」「河豚」「山芋」「修驗道」「帝釋峽記」などの作品を讀んで痛感することは、彼がうひうひしい氣持をもつて、文學に本氣でうちこめないでゐることである。それにもかかはらず、文學といふ捌け口を借りなければ、なんとも表現できないみづからの情を、どうにかして、この形のかに盛りこもうとしてゐることである。

そのために彼の作品は、小說の純粹な美くしい形のなかに息づいてゐるよりは、むしろその形を崩すことによつて、自分の眞情を語つてゐる。形を崩すことでしか、ほんとのものが語れないのである。

自分の生きてゐる場所を愛しながら、自分の生きてゐる場所に倦怠を感じてゐる人間である。野心に生きてゐるよりも、夢に生きてゐる人間だ。そしてその夢だけが實生活からはみだすことによつて、彼の倦怠に、一種の人間味の深い陰影を宿させてゐるのである。力をだしきつて生きる場所をもつてゐない。そこからくる退屈をかみしめることで、その世界を掘りさげようとしてゐる。さういふ諦めた生き方のなかに、つよい自嘲がしみてゐるのである。

九州の一角で彼が書いてゐた小說の、殆んど全部に共通して登場してくる人物は、すべて

世の敗慘者めいた影を帶びてゐる。かういふ人物に魅力を感じ、かういふ人物を好んで題材にするところに、彼の倦怠感のひとつのあらはれがある。

しかし、その登場人物たちは、いつも生活に夢を孕ませてゐることで、決して單なる敗慘者の姿はしてゐないのである。むしろ世間からは敗慘者と見えるやうな場所に、みづからの夢のために、生きることを求めたひとたちともいへるのだ。かういふ場所に、この作家の眼が向くのは、彼のなかに捨てても捨てても捨てきれぬ人間に對する鄕愁が燃えてゐるからであらう。それが彼と文學を運命的に結びつけてゐるものである。一度は文學の道から離れながらも、遂に文學を捨てることのできなかつた血が、ここにある。

そして彼が、九州の一角で、再び文學を始めたとき、彼は、非常に偏した材料を、小說の崩れた形のなかへ盛りこむことでしか、自分の心情が歌へなくなつてゐたのである。

學生時代に、彼と同窓で、一緒に同人雜誌をやつてゐた丹羽文雄の話によると、彼は、その當時の仲間のなかで、いちばん大人であつたし、いちばん完成した小說を書いてゐたさうである。それは形の崩れてゐない、本道的な形式を歩いてゐる短篇小說である。

つまり彼の場合には、實生活にとびこむ前に、才能が、ひとつの完成した文學形式を捕へてしまつたのである。そして彼は、そこで一應文學から遠のいて、實生活にとびこむことで人間的な成長をとげたのである。しかるに彼の文學形式は、すでに彼が實生活にとびこむ前に完成してしまひ、その完成のまま、そこに置き捨てられてあつたのである。この事情が生んだ不平衡から、彼の「糞尿譚」など一聯の、あの崩れた形の小説が生れでたのではないかと思ふ。

私は假に、文學的才能といふものと人間的成長といふものを、ここで分けて考へてみたがそれはそれほどはつきりわけて考へられるものではない。ただ文學との密接な關係のなかで彼の人間的成長が遂げられたのでないために、過去において完成してしまつた彼の形式は、今の彼の眞實を生かすためには役立たなくなつてゐるのである。もしも彼が再び文學を始めるときに、以前の形式を、そのまま踏襲することができたのであるならば、それは彼が人間的に成長しなかつたことになるのだ。

そこで彼は、その形を崩すことで、自分の心情を、そのなかに生かしたのである。しかし

形を崩すといふことはことは、形を整へるよりも一層にむづかしいことである。形を整へようとすることは、不足な力量を助長しようといふ情熱でできるのであるが、形を崩して、しかも心情を生かすといふことは、過剰な力量を、その場所に過不足なく生かすといふことである。さういふ點、彼は確かに豐富な才能と力量の所有者である。そのことは人間についてもいへることと思ふ。

さういふ力量のために、彼は自分の生活のなかのあらゆる面において、眞劍に努力して、それを成しとげなければ、なしとげることのできないものを失つてしまつた狀態のなかにゐる。彼の小說のなかに、眞劍な努力に對する憧憬が、はにかんだ表情をしながら、つよくでてゐるのは、そのためではなからうか。これは、おそらく倦怠が生んだ情熱であらう。

やがて彼の倦怠を吹きとばすやうな狀態が彼を訪ねた。生命を的に戰場に立つといふ狀態である。そこでは眞劍な努力が要求されてゐる。彼が、みづからの眞劍な努力に、いつぱいの生き甲斐と陶醉を捧げてゐるさまは、彼の戰爭小說をよんだものは知つてゐるであらう。そして、彼の頽廢した文學形式は、この偉大な事實の前に立つことで、再び健康をとりもど

したことは、やはり彼の戦争小説のなかに、諸君が見られる通りである。

中里恒子について

中里恒子氏は、日本の文壇にもつとも貧困してゐるもののひとつを豐富にもつた作家である。評議員諸氏の選衡の感想では、私の思つてゐるそのことに觸れたものは見當らなかつたが、しかし今度の芥川賞が中里氏に授賞されたことについては、それがひとびとの氣づいてゐないもつとも大きな理由のやうに思ふ。それはひとくちでいへば、育ちのよさがもつてゐる感情と感覺とでもいつたらよいであらうか。それが中里氏の魅力である。

今度の芥川賞は、ひとりの作家を發見したといふ力には缺けてゐる。それは中里氏が、すでに著名だからといふ理由からではない。ひとりだちの作家として認めるには、まだ餘りに未熟だといふ理由からである。しかしそれにもかかはらず中里氏を選んだところに、文壇の

企てたのではなかつた偶然のよき自己批評があり、今度の授賞を、文壇の自己批評とみるところに、もつとも深い意義を探しだせるやうに私は思つてゐる。

中里氏は、もう十年、小説を書きつづけてきてゐる。そして可成り以前から一部のひとたちには支持されてきたやうであるが、私は今もなほ、それほど高くは評價してゐない。支持するひとたちの支持する氣持には、ある首肯を感じてゐるが、私のこころは、まだ中里氏の作品に動かされたことはない。それだけ今度の授賞を知つた最初には、誠に意外の感じを受け、やがて本文の當初に述べたやうな氣持に落ちついたのである。

それ故、評議員諸氏が中里氏の藝術を批評した言葉のなかでは、私は佐藤春夫氏の言葉に、もつとも同感を感じうるものである。佐藤氏は次のやうにいつてゐる。

『多數の委員が中里氏を選んだのは故なしではない。何しろ「色の白いのは七難かくす」作風には相違ない。素質のいい素人の水彩畫か何かのやうに、明るい新鮮な趣の好もしさはある。言はばあまり弱くたどたどしくさへある。けれどもお孃さんの水彩畫の出來のいいのを

質はないかと言はれたやうな心持であつた。一家を成すのはまだ少々歳月を要するのではなからうか。相當年期を入れてゐるとすると稍心細い氣もしてくる。もしかするとあの好しさも未完成のためのもので、年期を入れると失はれる質のものかも知れないなどとも考へられてくる。」

佐藤氏のいひ方は、可成り假借のないいひ方である。それだけに私は同感を感じてゐるのだが、他の評議員諸氏は『乘合馬車』のこのやうな弱點を全く氣づいてゐないわけでもないし、知らないわけでもないやうだ。むしろ却つて、そこによさを見出してゐることに一致してゐるやうである。氏らの讃辭は全く同一のエスプリの上に立つてゐる。その讃辭を拔いてみよう。「鮮かで綺麗だ」、「織細だし色彩感もあるし、柔軟性にも富んでゐる」、「柔かく細かい花である」、「味ひも細い」、「大變にうつくしい小說」、「女性らしい繊細な心持が美しく美事に描かれて」、「上品な繪のやうな」、「明るい小說」誰が讀んでも見出すよさは全く同じところにあり、同じやうな賞め言葉になるのは、つまりこの藝術世界が非常に單純で、複雜な

深さがなにもないために、ひとりのひとはある一面のみを見たが、他のひとはまた別な一面を見たなどといふことが起らないためであらう。さう考へるとき、これらの讃辭の指示してゐる内容の正しさと同時に、諸氏の讃辭が、これほど同一になつてゐるところにまた、中里氏の藝術の性格が、はからずも語られてゐるのである。

次に非難の言葉も、ひとつの共通した方向を示してゐるのを見るとき、この作品の單純さは一層はつきりする。私のいふのは單純化ではなく、單純である。あるひは簡單といつた方がよいかもしれぬ。「綺麗ごと過ぎるかも知れない」、「どうも僕には底の淺い氣がした」、「少し弱い」

以上、私の拔き書きした讃辭と非難の言葉をよんで、敏感な讀者ならば、讃辭も非難も中里氏の作品のなかの同一な面に向けられてゐることに氣づかれるであらう。つまり、かういふよさのある代りに、かういふわるさがあるといふのではなく、よさそれ自身がもの足りなさとなつてゐるし、もの足りなさそれ自身がよさとなつてゐるのである。佐藤氏のいふ「好

もしさも未完成のためのもの一でといふことが、ひとつの事實を語つてゐることになる。

よさがもの足りなさであり、もの足りなさがよさであるといふことは、その作品が藝術としてきはめて中途半端であることを物語つている。よさはあくまでもよさとなり、わるさはあくまでもわるさとなるところに、ひとりの作家が、作家としてのみづからの宿命に徹した藝術が存在するのである。さういふ點から、中里氏は、まだ、ひとりだちの作家といふことはできない。

しかし評議員諸氏も、また、中里氏をひとりだちの作家と認めては對してゐないやうである。たとへば北原武夫氏などに對しては、評議員のなかばのひとは作家對作家の對等の口をきいてゐるが、中里氏に對しては、どの作家も作家に對した顔ではしやべつてゐない。まるで婦人雜誌の投書の選評をするやうに優しく、そして素人の作文の採點をするやうなゆとりのある表情である。この程度の作品が、このやうに芥川賞に選ばれたといふことは、現代の日本文壇に、もつとも貧困してゐるものを中里氏がもつとも豐富にもつてゐたためだと私は思ふのだ。その點中里氏は文壇的雰圍氣に毒されずに文學的雰圍氣をいつももちつづけてき

たひとのやうだ。

日本の傑れた文學の多くは、大部分いはゆる日本人的眞劍さのなかに生きすぎてゐるのである。努力的精進苦業の文學である。それは丁度、七十年で今日を築いた日本の文化の姿をそのまま反映してゐるのである。ある意味からいへば成りあがつてゆくものの苦闘の緊張がひとをうつのである。そして多くの文學は、文學の苦しさのみを語り、そのたのしさを表現できなかつた。たのしさを表現できなかつたのは傳統的な育ちのわるさであり、そこからくる貧困のためである。眞劍だが痩せてゐるのである。

さういふなかへ中里氏は、香りたかく文學のたのしさをもちこんできたのである。しかしそのやうなたのしさを、氏がもつてゐたのは素人だからである。（家庭をもつてゐることが大きい役割を演じてゐる）そして日本の文壇も、この授賞によつて、素人のもちこんだ文學のたのしさを受けいれることのできるだけの餘裕ができてきたことを、世間に示したやうに思ふ。私は中里氏の授賞を、こんな風に考へてゐるのである。

中原中也のこと

中原の詩には、僕は深くこころを捕へられてゐたが、中原は嫌ひであつた。そのことは、ながく僕を苦しめてゐた。生前、僕は中原に會ふことを極力避けてゐた。それでも會ふと、ごきげんをとるやうなことをいつては、別れるとホツとして、幾度も自分にいやな思ひをした。僕は中原に完全に頭があがらなかつた。その上、いつも恐迫觀念みたいなものにおびやかされてゐた。今でも、それはそのままの形で殘つてゐる。中原といふ人間は、はつきりつかめてゐない。避ける氣持が本能的に動くのである。しかも僕にとつては、生涯、忘れ捨てにすることのできない男である。僕は、この男に亂されることをおそれながら、この男の言葉は、ひとつ殘さずこころに刻みつけようとする風な氣持であつた。

中原を知つたのは、たしか昭和三四年ごろである。僕はそのころ、高等學校の學生であつたが、先生のなかには、阿部六郎氏や織田正信氏がゐた。同級には大岡昇平がゐて、フランス語を始めるといひ、國語の先生をしてゐた村井康男氏に、家庭教師の紹介を頼んだ。村井さんは學友の小林秀雄を紹介してくれ、大岡は小林にフランス語を教はつた。大岡は自宅にきてもらつたり、小林の家に出かけたりしてゐたやうであるが、その席にたびたび居合はせたのが中原中也である。大岡は小林を知り、小林を通じて中原を知つた。

大岡は、いろいろ、ふたりの話をして、一度會ひにこいといふ。ある晩、私は出かけていつて、そこで始めて小林や中原に會つた。僕は文學をやつてゐるひとに始めて接し、その態度やものごし、すべてが變つて見えた。三人は泡鳴について、ずゐぶん話し合つてゐたやうにおぼえてゐる。僕は丁寧な口をきき、君、そんな言葉使ふのやめないかと中原にいはれてどぎまぎしたりした。その衝撃は、今もつよく殘つてゐる。

中原は、それから、僕の家にも、たびたび遊びにくるやうになつた。そして僕は中原の感化によつて、次第に文學の方へ向いていつた。僕のこころの眼は、中原によつて、どれぐら

ゐひらかれたわからないのである。中原に會はなかつたならば、僕の生涯は、たしかに今とは變つてゐたであらう。その點、僕の文學的生涯の上に、中原は、きわめて大きな影を落してゐる存在である。彼のいくつかの言葉は、いつも僕の頭から離れたことがないほどである。

しかし今、考へてみると、中原の藝術にこころひかれたといふことは、純粹に僕自身の感動による發見だけではないやうだ。周圍のひとたちに、さう教へられて、さう教へられたことでさうかと思ひ、さうかと思つたそのこころでだんだん中原に近づいていつたやうでもある。

中原を嫌ひだつた氣持は、たしかにもつてゐるのだが、なにかおびえてゐるといふ以外、僕には、まだ、その氣持が、はつきり說明できない。說明できないといふよりも、そのことを、はつきり考へないでゐるやうだ。彼の前では平俗な常識が通用させてもらへなかつたことも、自分の常識的な生活にとつての苦痛だつたに違ひない。しかもそのことで自分の方が正しいなどといふ確信はないし、避けるといふことより外に、僕にとれる方法はなかつたのであらうが、それだけがすべてとは思へないのである。

中原の訪問を受けると、自分の表情にある苦痛のあらはれるのが、自分でわかるやうな時期があつた。中原は部屋の障子をあけて、僕の顏を見ると、あ、迷惑だといふ顏してるな、とそれが、最初の挨拶である。僕は自分の顏をもてあましてしまふ。今日は本を讀みたいから歸つてくれと僕はいふ。彼は、さうか、じや俺も本を讀もうといつて、書架の一冊を拔くと床の間の上にあぐらをかき、本を開いて、じつとしてゐる。僕は途方にくれて、ぼんやりしてゐると、オイ早く讀めよといふのだ。

そんなことがあつてから、僕は夜ふけまで、あてどもなく外を歩いてゐたころがある。そして、もう今日はくまいと思ふ夜ふけになつて家に歸つたりした。そして僕には、その時分S中原の氣持を考へてゐる餘裕などはなかつた。

その後、中原が中心になり、河上徹太郎の編輯で「白痴群」といふ雜誌が生れた。僕がものを書きだした最初である。

僕は中原によつて精神の世界へ導かれ、中原によつて書くことを敎へられた。僕は、いつか中原について詳しく書く日がくると思つてゐる。それまでは、この負目を背負つた感じは

忘れ捨てにすることはできないであらう。

「在りし日の歌」の卷頭にある中原の寫眞を僕は好きである。今でも、あの寫眞を出してきて見入る日がある。そしてそれはいふにいはれぬやうな妙な氣持なのである。

上田廣・山田清三郎・小山いと子

一作に、この紙數の大部分を割いて批評したいと思はせるやうな作品は、まづ見當らなかつた。

ジャーナリズムの上では、中央公論が陣中小說と銘打つてゐる上田廣氏の「歸順」が、まづ注意を惹いてゐる作品であらう。これは投降した農民出身の一支那兵の手記の形を借りた虛構の作である。いはゆる小說である。

この作品への批評とは、直接關係がないが、この作品を讀みながら、もつとも痛感したことは、銃後にゐるわれわれが、戰場にゐる文筆家にもつとも求めてゐるものは、事實の報導だといふことである。今の戰爭は、われわれ國民と非常に深い關係をもつてゐる。身は銃後に

あつても、關心は始終つよく戰場に向いてゐる。事實を知りたい。少しでもたくさん事實を知りたい。これが戰地からおくられる文章に向けられてゐる、讀者たちのひとつの切實なところである。

もちろん戰地からは、おびただしい通信がきてゐる。第一に新聞の報道があり、ニュース映畫があり、從軍者たちの報告がある。ひとびとは、それにも注意してゐるであらう。しかし、ひとびとは、それにもかかはらず、あるひはそれによつて、一層事實に飢えてゐるのである。飽食感を知らないほど、ひとびとは、もつとほんとのことが知りたい、もつとほんとのことが知りたいといふ、事實への激しい要求を抱きつづけてゐる。火野葦平氏の、あれだけの異常人氣も、彼の作品が傑作だからといふよりは、ここにきつと戰爭のほんとの姿があるだらうといふ、事實を知りたがつてゐる國民の熱情の反映と見る方が至當のやうに思へるのである。もしも火野氏の作品が、一篇の虛構な構成をもつたいはゆる小說であつたならば、あの異常人氣は、今日の狀態とは、いささか變化をきたしてゐたかもしれない。そのことは「麥と兵隊」と同時に發表された上田氏の「鮑慶鄕」に對する不滿のなかに、あれはいはゆ

る小説だといふ聲が、低流としてあつたことからも感知できる。私は、事實を知りたいといふ要求は誠實な要求だと思ふ。戰場の文筆家たちに、事實の報道をおくつてもらひたいのである。

事實を小説化した火野氏に比べると、上田氏の作品は、今度の「歸順」も、ひとつの虚構のなかに、實際の經驗によつて得たものを生かさうとした小説である。そして戰場の經驗をもたないものには書けない實感を、小説のなかに生かし得た點、この作品から事實への要求を滿たさうとした讀者は失望するかもしれないが、文學のためには、ひとつのプラスをなしてゐる作品である。

これは戰意をもたない農民あがりの支那兵孫丙山が、生き拔ける唯一の道として、日本軍に投降するまでの戰場記錄である。日本兵の激しい追擊から逃れて一瞬の安心を得るあたりの描寫は、なかなか傑れてゐる。

「生き殘つたのだ……何んとも表現しがたい悲痛な歡喜が、自分の存命をたしかめた喜びの中から湧きあがつた。私は暫く草場に突ツ伏したまま、自分の心臟の鼓動に聞き入つてゐた。

それから、私はまた、後方へ耳を澄ませた。けれど、幸ひにも、日本軍は追つてくる樣子もなく、一發の銃聲も聞かれなかつた。私たちはさうして傷の手當もしないで、長いこと夢うつつでゐた。時々懶げに顏をあげ、自分自身に見入つてゐるものがあつた。まだ生きてゐるといふ事實が、信じられないやうでゐて、それを確めると、再び疲勞の中へ滅入り込んで行くのであつた。咽喉の渴き切つた私は、ふと狹谷で彈丸の雨を浴びながら飛びこえた、綺麗な流れを思ひ出した、その瞬間の瞳にも、小さな岩のひとつひとつが、見わけられるほど澄んでゐた水」

この作家は、いかにも素直な溫かい心情をもつてゐる。それが作品全體にロマンテイツクな美くしさを、にじみださせてゐるが、またそのために淺く上品になつてしまつて、力を弱めてゐるところもある。

「歸順」は成功作とはいへない。主人公の支那兵の心理が、あまりに單純すぎるし、歸順にまで盛りあがつてくる力に缺けてゐる。あまりに最初から戰意がなさすぎるし、あまりに最初から支那軍に幻滅しすぎてゐるし、あまりに最初から日本軍を畏敬しすぎてゐる。さういう

ふことが、作品をあまりに平面的にしすぎてしまつたし、讀者を納得さすよりも、却つて不安にするのである。日本人の考へた、弱い支那兵といふ概念の理想型にすぎないやうに見える。現實感が稀薄なのだ。もしも上田氏の、この作品が、一投降支那兵からの聞知のやうなものを基礎にしてつくられてゐるとすれば、その支那兵が上田氏に知らせた事は日本兵が滿足するやうな面でだけの支那兵ではなからうか。

しかし事實このやうな支那兵はゐるであらう。けれど、その心理の現實性は、もつと複雜な要素を含んでゐるのではなからうか。その複雜を底に潜ませなくては、この單純は強く生きてこない。上田氏があまりに戰場の渦中にゐるために、却つてこのやうな、いはゆる小說を書くために必要な要素に、感受性の働かなくなつてしまつたものがあるのではないだらうか。すくなくとも、この主人公は、存在の肉感性にだけは、確かに缺けてゐる。支那農民の顏が浮んでこないのである。顏が讀者の前に浮んでくるといふことは、讀者を感動させるためにもつとも必要なことである。

山田清三郎氏が「嵐の蔭に」(文學界)を書いてゐる。出獄後のあの系列に屬する決心披歴小說である。私は、山田氏がいつまでもこんなところへとどまつて、こんな小說を書いてゐることを否定したいのである。

今度の「嵐の蔭に」は、鹿地亘との交友追憶を書いたものである。プロレタリヤ運動史の一端としてみれば、ここには私などの知らない事實もあつて興味のないこともない。しかし作者自身が、そのことを露骨な賴りとしてゐることは、作者の精神の貧困を、あらはしてゐる。發展のある豐富感に缺けてゐるのである。感傷の浪費か、めだちすぎるといひたいのである。しかし、それは、この一作にかぎつたことではない。氏の轉向小說全部についていへることだ。作品が獨立獨步してゐない。共感の强要のなかに、微妙に甘えが潛んでゐる。同志によりかかりすぎてゐるために、反省が華美な面だけを淺く渡つてゐるのが、山田氏の作家としての大きな隙になつてゐる。かういふ作品を書きつづけてゆくことのなかに、文學者としての發展は感じられない。「耳語悔懺」一作あればいい。その後の作品は、單に作つた材料を扱つてゐるだけで、動機の掘りさげも發展もないくりかへしである。小說を書いてゐる

態度ではない。この動機を、くりかへしテーマとするよりは、もつと發展のある小說の面の底に、これを滲透させ、生かしてゆかなければならないのである。作家とし視野の大きい開拓が望ましいのである。

「嵐の蔭に」だけのなかで、私が特に氣にかかつて仕方がなかつたのは、登場人物のすべてに、それが實在の誰かといふことが、すぐわかるやうな變名を用ひてゐることである。私が特に變名といふのは、これらの人物は、小說のなかに獨立して生てゐるのではなく、實在の人物を賴りにして、小說のなかに動いてゐるのである。それ故、それが實在の人物の誰だか全然わからなくなつてしまつては困るのであらう。讀者に、すぐ誰だかわかるやうな考慮が拂はれた變名としてある。そのやうな變名を、なぜ用ひなければならなかつたのであらうか。變名にしなければならない理由が、どうも薄弱に思へるし、變名にした方が、この小說の迫力が加はるといふことは、どうも思へないのである。かういふ小說は本名で書いた方が、一層のこと明朗な魅力があるのではないか。

私は山田氏を眞面目なひとと信じてゐるが、この眞面目さには、もつと柔軟性がほしいと

思ふ。

小山いと子氏は、女流作家には珍らしく野心的な材料ととり組んでゆく意欲的な作家である。今月の「4A格」(新潮)も力のこもつた作品である。力のこもつてゐるといふ點では、今月注目すべき力作であらう。

しかし、なにか根本的なところで、小說を書く態度がずれてゐるのではないかと思はせる通俗的なマンネリズムの上に、構成の基礎ががつちりときめられてしまつてゐる。一流の大作家として、今の手腕を生かすためには、この基礎が一度根柢からつきくづされなければならないのではなからうか。

登場する人物が、ほんとに氏自身の眼によつて、現實のなかから發見してきた人物ではなく、文學のなかでおぼえた人間の形を、現實のなかにあてはめて、調べた材料を生かすといふ用を辨じてしまつてゐるところがある。舞臺があつて、舞臺の上に人形を動かしてゐるやうな、しらじらしさが見える。

ここには、眞の人間探求と眞の現實探求が缺けてゐる。舞臺となる材料を調べる情熱で、それをすりかへてしまつてゐるのだ。しかし今日の多忙作家には珍らしく、エネルギツシュに着實に、材料の調査をしてゐる點は、推稱すべきである。そしてそのことが今までの作品の一種の壓力になつてもゐるのであるが、それだけでは、ほんとの小說にはならない。

調べた材料によつて、現實に小說を模倣させてゐられるのは、作者に獨創的な思考がないからである。材料を調べるといふことは、事實の調査であると同時に、單なる知識の蒐集ではなく、人間と現實のリアリテイの探求發見を意味しなければならない。そして眞の小說はその上に結晶させられなければならない。さういふ變化が顯著にあらはれだしたならば、私は、この作家の手腕に期待していいと思つてゐる。

上田進氏の「おちか一家の夏の話」（文學界）や中村地平氏の「離れ島にて」（文藝）は印象に殘つてゐる。平川虎臣氏は油が乘つてゐるやうだが、この感傷過剩を、なんとか清算しなければいけない。木山捷平氏の久しぶりの作も期待したが、今度のものはよくない。

川端康成氏が「日本評論」へ小品を書いてゐるが、先月の「百日堂先生」にせよ、かういふものを讀むと、こころからたのしめ、慰められる。この藝術的香氣と不思議な魅力は、どこからくるのであらうか。どんな表現も、その表現をあやつつてゐるといふよりは、その表現に、自分の全存在をかけてゐる重さから生れる悠久感のためであらうか。

文章のこと

先夜、阿佐ケ谷の通りでひよつこり久しぶりの井伏鱒二氏にあつた。近所で酒盃を重ねることになり、いろいろ氏の藝談をきいたが、大へん面白かつた。さすがに本格的な作家修業をしたひとである。今日の新人作家に比べて、ここにはいはゆるあの「藝術家」がゐると思つた。

氏は、今日の流行作家たちが、文章といふものに對して、非常に無神經になつてゐることを嘆いてゐたが、その一例として――今日の流行作家たちの文章で氣にかゝるのは、大抵のひとたちが、さういふ、かういふ、ああいふと書くべきところを、さうした、かうした、ああしたと書いてゐることださうである。これは音感的に非常に汚い。

氏の説によると、この、さうした、かうした、を決して使はない作家は、谷崎潤一郎と佐藤春夫である。春夫は、ただ感じがわるいから使はないとだけいつてゐるさうだが、潤一郎の理由は、これは東京辯ではなく、東北の方言だから使はないとのことだ。

彼自身は、もちろん、決して使はない。使ふ場合は、作中に女學生の下手糞な手紙などを挿入するときの、その文中にかぎられてゐるさうである。

私は、この話を大へん面白いと思つた。ここでは、この話の眞僞は問題でない。みづから藝道に精進したひとの一種適確な感じがくるのである。

私は最初この話をきいたとき、自分が多くの現代小説をいつも讀んでゐながら、さういふことに少しも氣がつかないのは、――今でも實際の作品についての具體的な感じはつかめてゐないのだが、それは、自分が實際に小説の苦勞を經驗してゐないために、ぼんやりしてゐるのだと思ひ、さういふ自分が大きな顔して作品評などやつてゐるのを、いかにもはづかしく思つたのだが、だんだん考へてみると、私が、さういふことに氣づかなかつたのは、外にも理由があるのではないかと考へた。といふのは、私なんかよりも一時代先輩である井伏氏

などの育つた時代の環境は、この言葉に對する反撥が、特につよかつたのではないだらうか。

かういふ考へは、かつては、さうした、かうしたといふ言葉が、新鮮な響きをもつてゐた時代があるのではなからうかといふ豫想の上に立つてゐる。といふのは、私は、この言葉の感じから、現代作家よりも、しきりに田山花袋を思ひだしたのである。まだ花袋の作品について、實際に調べてみないのだが、どうも花袋の一種生硬な感じのなかに、それがあるやうに思ふ。そしてそのことから大膽な想像をしてみると、さうした、かうしたといふ言葉は、自然主義時代の文章の癖として、當時においては、時代的な新鮮さがあつたのではなからうか。

潤一郎とか春夫とかいふひとは、いはば自然主義に對する反抗として擡頭してきた作家である。だから彼らが、その癖に對して特殊な敏感さをもつてゐたのではなからうか。井伏氏も、いはば、さういふ文學的環境のなかで育つてきたひとである。私も大體において、さうした、かうしたといふ言葉は使はないが、その言葉を特に敏感に意識しないのは、私たちの時代が、すでにさういふ反抗を必要としなかつたためではないかといふ氣がするのである。

しかし、そのことは別として、今の新人作家たちが、あまり文章に留意しなくなつたのは私も大へん同感したのである。しかし氏にいはせると、それは留意すべき時期にまだ立ちいたつてゐないので、彼らもやがて、かならず、この問題に逢着すべき時期に立ちいたるといふのである。井伏氏は非常な確信をもつて、そのことをいつたことに私は興味を感じた。といふのは今日の新人作家が、かならず井伏氏の考へてゐる通りの問題の前に立たされると思つたからではない。私は、むしろ、さういふ方向に彼らの進まないことの方に、はるかに多くの可能性を感じるのである。私が興味を感じたのは、その豫言の性格のなかに、井伏鱒二の姿が、くつきりと浮んでゐることである。確かに自分の道を歩んできた作家の識見の權威がこの非常な確信の表情のなかにはしみてゐる。

彼の說によると川端康成の文章には、非常にナマな言葉が混入してゐるさうである。それに比べて、文章が、ほんとに練れてゐて、少しもナマのものの混入してゐないのは横光利一ださうだ。横光利一を今日あらしめてゐるものは、文章だけだとさへ、彼は極論するのである。

今日の作家のなかで、文章に對する非常につよい關心をもつてゐるのは確かに横光氏と井伏氏とである。それだけに、氏らは、いつも文章といふ巨大なものの前に立たされてゐる。氏らの文章といふものは、書いてゐるうちにできてしまつたものではない。書くためにつくつたものである。いはば文章において、人工的建設をしたひとは現代文學においては氏らが代表してゐる。氏らは自分の文章を自分のものにしたひとである。

そして今や、横光氏にしろ井伏氏にしろ、自分の文章といふ大きな據りどころをもつてゐると同時に、また自分の文章といふ大きな十字架を背負つてゐるのである。さう思つてきくとき、私は井伏氏の言葉のなかに、非常に痛切な聲をきいた思ひがしたたのである。

川端康成の文章

一

「雪國」を中心として、川端康成の文章を論じよといふ課題を與へられて、久しぶりに、この小說を讀み直してみて、私はまた新しい感動に、こころを奪はれた。しかも始めて、この小說に接するかのやうな新鮮な魅力にみちてゐる。

私は、この小說が、斷片的に雜誌に發表されるごとに、のがさず讀んでゐた。それが「雪國」といふ題名のもとに集められて一冊の書物になつたとき、また通讀した。この書物は昭和十二年六月發行となつてゐるから、最後に讀んでから、一年近くなるわけだ。今度は三度

目である。三度も讀んで、そのたびに新しい魅力を讀者に與へる作品は、名作といふ名を冠してもよい小說である。

私は、文藝愛好家から、川端康成の代表作はなんですかと質問されるとき、いつも擧げるのは「禽獸」である。多くの仕事をした作家の場合、代表作を一篇擧けるなどといふことは嚴密な意味では、殆んど不可能であるが、川端康成の場合には、私はいつも一種の確信をもつて、「禽獸」を擧げる。「禽獸をお讀みなさい。禽獸一作よめばいい。その代りあれをくりかへし、くりかへし、お讀みなさい」

今度「雪國」を讀み直してみて、私は、やはり、この意見は代へる必要がないと思つた。といふのは「雪國」の方が劣つてゐるといふことではない。「雪國」のなかにあるものは、すべて「禽獸」のなかにあつて、「雪國」には「禽獸」のなかにないものは、なにもないといふことである。「雪國」は、まあ「禽獸」の普及版といつてもよい。

もちろん「雪國」は名作であり、氏獨自の文章の光りにみちてゐる。そして讀むごとに始めての小說に接するやうな魅力があり、別な側面がくつきりとしてくるのは、名作の豐富さ

を證據だててゐることに違ひはないが、もうひとつ、この「雪國」の場合には、この小說が大へん難解であつて、一度讀みとばしただけでは、意味のわからないやうな描寫の文章が多くあるためだと思ふ。

川端康成の文章には、宇野浩二の文章のやうな、嚙んで含めるやうなくどくどしさが少しもない。きはめてそつけない。といふよりも一行の文章が、感情のさまざまな姿を說明するのではなく、その一行の文章のなかに感情の結晶をこめてしまふ。宇野浩二の場合には、むしろその結晶をほぐすことで文章を書いてゐるのだ。しかも宇野浩二は、なんらかの感情を呼びさましてくれた、その舞臺を描寫するが、川端康成は、それから受けた感情の方を書いて、その感情の表現を助けるためにだけしか舞臺を書かない。

だから讀者は、宇野浩二の場合には、そこに展開する舞臺や道具立は、はつきり浮べることができて、ただそこに盛られた感情は作者と同じだけの深さで理解することはできるかどうかわからないにしても、その場面だけは、とにかく、はつきり浮べることができる。それに比べて、川端康成は、そこから受けた感情の方を書くので、その感情をよむことだけでは

讀者はかならずしも、その舞臺や道具立を、はつきりと、頭に浮ばすことのできない場合がある。そのどこかはつきりしないところが、讀者にとつて、なにか底のしれない深さを感じさせて魅力になる場合もあるが、そのためそこがよく理解できないといふ作品の難解さになる場合がある。殊に複雜な心理や深い感情が、單彩のやうな文章で書かれてゐると讀みのがしてしまふ場合が多い。川端康成の確立した文章は、大へん非通俗である。この文章の運命的な非通俗が、氏の世界を通俗から救つてゐるかもしれない。

私のいひたいことを述べるのには、かならずしも適當な例ではないが、たとへば、この小說には駒子といふ田舍藝者の乳房を愛撫する場面が三四あるが、乳房といふ言葉は一度もでてこない。また二度目に女に會ふとき、「『こいつが一番よく君を覺えてゐたよ』と、人差指だけ伸した左手の握拳を、いきなり女の目の前に突きつけた」といふ風な表現にしても、觸感の記憶の現實性を語つてゐるのであらうが、かなり難解な表現といふことができるであらう。しかし氏の文章が、さういふ表現に終始してゐるからこそ、「悲しいほど美しい聲」とか「凉しく刺すやうな美しさ」といふ風な表現が、外の作家には見出すことのできない具體性

をくつきりと捕へることができるのであらう。そしてそれは、ひとつの觀念を語つてゐるよりも、感覺といふ具體の上に立つてゐるからだ。

二

私は、本誌の前月號で横光利一氏の文章について語つたが、そのなかで比較するために、川端氏の文章の本質についても語つた。「川端氏の文章は、こころの流露感に身を任せて、あふれてゐる文章であるが、横光氏の文章は、湧きあがつてくるものへの自制に緊張してゐる文章だ。川端氏は夢を追ふひとであり、横光氏は夢の醒めないひとである。川端氏が夢がないために、大膽に夢が追へるのに比べて、醒めない夢のなかに生きてゐる横光氏は、常に夢に對して反省的にならざるを得ない。ここから感覺の美くしさに生きる文章と、それを觀念に昇華しようとする文章の對象が生れてくる。流露に身を任せるといふことは思考の終つたところから文章が始まつてゐるといふことだ。自制に緊張してゐるといふことは、思考の發作とともに文章が始まつてゐるといふことだ」

このやうな川端康成の文章の姿を、もう少し違つた側面からその背後を考へてみよう。川端康成は、事實を常に、ほんの契機として、夢ばかりを描く作家である。そしてその夢のなかから事實を浮びあがらせる文章作法に生きてゐる作家である。事實を描きつくして、そのなかから夢を浮びあがらせようとする宇野浩二的な手法からは、むしろ逆な道を歩いてゐる作家である。そして宇野浩二を、今までのわが國の文章道に生きてゐる作家と考へるならば川端康成は、むしろその傳統に反した新風の開拓者だ。

私は、いはゆる「新感覺派」の文章運動から、ほんとにひとつの結實を得た作家は、川端康成だと思ふ。本誌前號で金原省吾氏が、川端康成の文章を論じながら、新しい言葉の使用法にある、ひとつの危險を指摘してゐる。「それはかへつて言葉の形に注意を拂はせて、表現しようとするものから遠離する傾に導きやすい」これは新しい文章を創造しようとする初心者に對してなかなか適切な忠告だが、川端康成の今日の圓熟は、金原氏も批難してゐないやうに、言葉の形に氣をとられるといふ空虛に落ちいらず、新しい使用法が、確かに新しい世界を表現なし得てゐるのである。

今までの常識的な文章道である事實ばかりを常に忠實に描いてゐる作家といふものは、實は事實の見事さを案外に知らないばかりでなく、事實の見事さに感動することまでが、きはめて稀になつてしまつてゐる。常に事實といふものに賴りながらも、事實といふものを、案外に輕く見てゐるものである。しかるに眞に夢に生きる作家にとつては事實とは夢の血戰の場所である。

川端康成の文章藝術も、「禽獸」以後においては、夢が常に事實といふ血戰の場所に生きてゐるのである。夢が、單に貧しい主觀の身勝手さのなかにだけ生きてゐるときには、夢は眞に夢のリアリティをもつて、積極的に現實に働きかける力はないのである。それは單に現實からの逃避として、作家を甘やかせるだけである。

最後に、川端康成を愛讀する作家志望の初心者に忠告したいことは、川端康成の文章は決して文章のお手本にしてはいけないところに、その生命と魅力があるといふことだ。一代果ての名文である。

藝術の表現形式

「すぐれた批評家といふものは、彼の存在そのものが文學に對する痛烈な批評となつてゐるべきである」（文學界二月號）

この言葉は、川端康成氏が小林秀雄氏の新著「文學」についての感想を述べてゐる文章のなかから拾つた言葉であるが、誠に味はひ深い言葉である。ほんとに魅力をもつた存在であるためには、またその言説が、ひとのこころにしみとほるためには、批評家は、かならず、そのやうな存在であらねばならぬ。そしてそのやうな存在であるためには、批評家もまた、人生に對して、作家と同樣な精神と情熱をもたなければならない。それに支へられることで、批評家は藝術家となり、藝術家であることによつて、自分自身のこととして自分自身の肉體

をもつて文學を捕へるのだ。

川端氏は、こゝで引用した短文のなかで、小林氏に、どうしても小説を書いてもらひたいといふことを、つよい情熱をこめていつてゐる。私は、この言葉は小林秀雄に對する今まであらはれなかつた深い理解だと思ふし、その意見にも、その理由にも、激しい贊意を感じるものである。小林氏は、この川端氏の勸めに對して「小説を諦めるのに二年かかつたんだがなあ」といつたと述べてゐる。この小林氏の感慨には、私は、そのときの表情やこころもち、まで、ぴつたりと響いてくるほど、一層痛切なものを感じるのである。(川端さんも罪なことをいふもんだ)

しかし、ここで、はつきりいへることは小林氏の評論の生彩は、この諦めた小説によつて支へられてゐるといふことである。もしも小説を書いてゐたなら、あの評論は、たとへあるにしてもあの評論の「生彩」はあり得なかつたであらう。叫びたいこころの聲は、たゞひとつであり、それがひとつの表現形式を確立したときには、それ以外の形式といふものは、どうしても餘戯になるのだ。

それは逆に、小説家の評論を讀めばわかる。私は作家の評論として、川端氏や最近の武田麟太郎氏の感想などに、大きな魅力を感じてゐるし、それを尊重してゐるものである。しかも、それらの幾つかの評論は、專門の評論家の文章よりも、はるかに深いものをもつてゐるし、立派でもある。あれだけの評論を書いてゐない專門評論家の方が多いくらゐなのであるが、それにもかかはらず、私は、それらの評論の見事さは、一種餘戲の見事さだと信じてゐる。その表現には、自分の全存在がかかつてゐないのである。川端氏の場合にしても、その鋭敏な感受性を、そのままに投げだせる無責任さに、大膽にいつてのけてゐる言葉の美しさがあるのである。自分の本業は小説だといふ安心がある。その背後の事情が、その文學の使徒の感想を萎縮させてゐないのである。同時にそれだけ、その言葉自身がもつてゐる實際の感化力は、その大きな魅力に比して弱いのである。武田氏の場合は、その評論は、川端氏に比べて、一層精神的ななにものも語つてゐない。これは小説を書くことによつて起つた、全く附隨的な仕事としての魅力である。つまりみづからの藝道に通じた藝術家の藝談にすぎないものである。さすがに年期を入れた玄人だけに、その藝談や、他人の作品を見る眼に狂ひ

はない。しかしその見事さにとどまつてゐのであつて、ここから生れでるもの、氏の小説から獨立した生命などといふものはないのである。

ひとつの表現形式に自分の全存在をかけるといふことは、他の表現形式を見失ふといふことである。畫家の文章の面白さがやはり餘戯の面白さにとどまつてゐることからしても、そのことは察せられる筈である。

小林氏にしても、その書くべき小説といふ表現形式を犧牲にしたことによつて、あの評論といふ表現形式を捕へたわけである。それ故、川端氏が小林氏の評論集を通讀して、そのなかから發見した作家魂によつて、改めて小説家としての出發を求めることは、小林氏に複雜な感慨を強ひるに違ひない。しかし小林氏も川端氏によつて、始めてほんとの知己を得たといふことはいへるであらう。

「旅さき」作家

作家に定住の家は必要ない、無意味なものだといふ意味の感想を、川端さんが、どこかで洩らしてゐたのをおぼえてゐる。作家を宿命としなげればならなかつた川端さんのこころもちの傳つてくる言葉である。

しかし、さうだからといつて、どんな作家にとつても、定住の家（この言葉には、いろいろな意味をこめてゐる）は、無用なものだとはいへない。むしろ定住の家に根を下してゐるからこそ、生れ得た傑作は、決してすくなくない。といふよりも、健實な地位を捕へた傑作の大部分は、定住の家を嫌悪しない作家の手から生れてゐる。川端さんのやうな場合の方が稀なのである。そしてその稀な心情が、身を不安定な位置におきながら、變らぬ瑞々しさと

張りをもつてゐる點で、獨自な作家である。

定住の家といふものは、それによつて、現實生活といふ組織のなかへ、ひとを結びつけてゐるものである。ある作家の場合は、その場所に自分を安住させながら、その外に立つて、觀念の結晶に勵み、思想の樓閣を築く。さうでなく、自分の定住の家を凝視してゐる人間はそこからの脱脚の情熱によつて仕事をしてゐる。「脱脚」の迫力は、定住の深さを背景にしてゐる。川端さんは定住の家を無視してゐるひとだ。定住の家をもちながら、そこに住んでゐないひとだ。しかも川端さんの心情が、いつも探してゐるものは、歸つてゆく家である。脱れようとする作家に對象させていへば、川端さんは、脱れるより求めてゐる作家である。世の多くの小説を「脱脚」の歌といへるならば、川端さんのは「歸心」の歌である。どんなものなかからも、いのちの姿を、あれだけ敏感に嗅ぎだしてくるのは、川端さんの切々たる「歸心」の心情である。

歸心の熱情を燃えたたせるためには、常に遊離が必要である。川端さんにとつて、旅は探

求であるが、同時にまた常に遊離としての意義をもつてゐる。川端さんの小説のリアリティは、現實から離れることによつてでなければ捕へられない現實を捕へてゐる。旅は、川端さんにとつては、見聞をひろめるためではなく、ものを見るために必要なのである。川端さんの場合には、遊離することが探求することであり、探求することが遊離することである。決して責任を負はないことで透明な眼が現實を射抜くのである。

「處女作の頃から今日に到るまで、私は宿屋で書くといふ癖がある。この卷の小説に限らず私の全作品の大半は、旅の宿で出來たものである。從つて、私は始終家を出るけれども、たいていは切羽詰まつた原稿を書くため、いはば書齋の移動であつて、旅らしい旅、旅のための旅は無である。ここに集めた小説にも、大旅行の所産と言へるものはない。しかしとにかく、身を別の土地に移すと、なにか心がひらけて、筆も動き出す習はしであつた。それが私の作品をどういふことにしてゐるか。」

この文章は、選集第二卷、旅の小説集の「あとがき」のなかにある言葉である。今度の選集には、このやうに、特に旅の小説集のある外に、「隨筆旅行記」といふ一卷があるし、「掌

の小說」にも、旅先で見た「いのちの姿」を書いたものが多いし、淺草ものを集めたものにしても、「淺草の旅」の記錄と見られるのである。

一種の虛無感が、もつとも素直な歸心の情を奏でてゐるのが、川端さんの藝術である。いつも對象を、すつぽり、こころに入れるために「がらんどう」のこころを用意してゐるひとである。作家にとつての旅行の必要さといふことは、川端さんのなかではすでに常識的な意味を脫脚してゐる。

思想家は旅行しないといふ意味のことを、ゲーテはいつたさうであるが、川端さんは、どんな意味でも、思想の建設家といふ風な存在ではない。さういふ意味の自己內容はもつてゐないひとである。

川端さんのもつてゐるものは、感動するこころと動く眼と書く手だけだ。そしてさういふ自分を知つてゐるひとだ。さういふ自分を知つてゐることに川端さんの、ひんやりした冷たさがある。

私は、ながい間、この冷たさに親しめない氣持でゐたが、このごろになつて、やつと、か

ういふ冷たさこそ、いちばんこつちを呑氣に向ひ合はさせてくれる溫かさだと思へるやうになつた。

私は、今度、從軍したペン部隊のなかに、瀧井さんが加つてゐることに興味をもつてゐるがおそらく瀧井さんの眼を借りなければできない、克明なものの見方をしてくるに違ひないとこの地味な人選が、案外大きな有意義を生むのではないかと期待してゐる。

同時に、この人選に、川端さんの加はつてゐないことを、非常に殘念に思つてゐる。これは單なる私の趣味からいつてゐるのではなく、日本文學のためにも、大きな損だと思つてゐる。川端さんは、きつと誰もが見ないものを見、誰もが書かないものを書くに違ひないのだ結局は、外のチャンスで川端さんも從軍することになるかもしれないが、私は、この感覺のエキスパートの出陣を切に願つてゐる。

作家本來の姿

あるときは船のなか、あるときは汽車のなか、それから宿屋の一室や、見知らぬ町の喫茶店の一隅などで、私は今月諸雜誌の創作欄を通讀した。そして疲れると、宿の廊下から小さな町の往還を眺めたり、船底に同室してゐる三等船客の顏を見廻したりした。それはなにか小說と人生とを比較しながら眺めてゐるやうな變な氣持であつた。別に比較研究しようとしたのではないが、小說を伏せて、眼にうつる世の中の風景をぢつと見てゐると、人生といふものが、どうにもどつしりと立派に見えて仕方がなかつたのである。眼にうつる風景は、いかにも、くつきりとした完璧なリアリテイを生きてゐる。それに比べて、これらの雜誌小說のなかの人生はなんとお粗末なものであらうかといふ感慨から、私は終始のがれることがで

きなかつた。ひとつひとつの作品短評をする氣持になれないほど、この空虛感は私につよくきた。そして、この旅先きでの印象が、今月の創作欄を讀んだ私の述べたいことの全部である。

一體この空虛感は、どこからくるのであらうか。旅先での私の眼にうつる路傍の片々たる人生風景に比べれば、どの小說もはるかに大きく深い人生の姿を描かうとしてゐる。中本たか子氏にしても、大江賢次氏にしても、和田傳氏にしても、德永直氏にしても、大田洋子氏にしても、その他の諸氏のものにしろ、路傍の凡庸な人生風景とは比較にならない人生を、野心的に扱つてゐるのだ。それにもかかはらず、それが野心的な作品であればあるほど、お粗末な人生だといふ感じはつよいのである。却つて上林曉氏の「離鄕記」(新潮)とか、太宰治氏の「富嶽百景」(文體)また德田一穗氏の「女の職業」(文學者)などといふ小品的な作品に胸にしみてくるものがあるのである。

このやうな身邊記的なものに比べて、大陸を扱つたり、大きな客觀世界を扱つたものが空

虚に見えるのは、それがなにか文學本來の眞實とかけはなれてゐるためではなからうか。さう解釋する以外に解釋のつかない氣持である。作品のなかに野心的に盛りこまれた人生が、ほんとの根をもつてゐないのである。それに比べて私が路傍で接した風景は、ほんとに根をもつてゐる。生きるべきものが、生きるべきところに生きてゐる。そのつよさ、その眞實さが、こゝには缺けてゐるのだ。

つまり作者の捕へた人生が、ほんとにその作者のなかへ根をもつて生きてゐない。かりものの世界を腕の先だけで描いてゐるだけである。作者が作者自身を根とした小宇宙になつてゐない。作者が、その世界を描かねばならない人間的な動機が深くないのである。それ故、作品の世界は、どのやうな大きな世界を扱つてゐるにしても、生きた人生のきはめてお粗末な模倣に終つてゐるのである。ここにはどんな意味での文學的創造をも見出すことはできないのである。

雜誌の諸小說を讀みながら、眼にうつる實人生の方が立旅に見えて仕方がなかつたと、私は先に書いたが、ほんとに傑れた文學作品を讀むと、實人生の方が、その小說に似て見えてくるものである。さういふ本來の傑れた小說がもつてゐた「文學の力」の衰微を、私は、純文學隆盛が叫ばれてゐる今日、痛感しないではゐられなかつたのである。時流を追つて現代に生きてゐる小說は、またおそろしく文學を見失つてゐるともいへるのである。

かういふ氣持で歸京した私は、今月の評論で、北原武夫君（文體）が、私の氣持を、實に切實に述べてゐてくれるのを讀むことができた。

「机に向つてゐるときだけが作家である、のならまだしも、札に向ふ時だけ作家になるやうな作家か、今日いかに多いことであらう。かういふ作家には、人生や人間性や又は文學そのものについての考察が、平生は特に思考の對象として意識的に採り上げられてゐない。從つて、平生人生や人間性について絕えず思考してゐるがために、實生活上での何等かの現實的經驗が契機になり、そこではじめて創作の衝動を感ずる、といふやうな、正常な意味での作

家的過程が全く逆になり、何かの事件や事實に打つかり、それに刺戟されてはじめて創作的衝動を感ずる、といふやうな奇妙な現象が生れてくる。思想が作品を生むのではなくて、事件が作品を生んでゐるのだ。」

ジャーナリズムが宣傳してゐる多くの力作は、實際、事件を描いてゐるのであつて、人生を描いてゐるのではない。作家の新聞記者化といふことは、今日の小說壇における掩ひがたいひとつの事實である。

さういふものに比べれば、井伏鱒二氏の「多甚古村駐在記」(改造)とか、私が前掲したやうな身邊記の方が、はるかに深く人生を描いてゐるのだ。

北原君は前記の評論のなかで、リルケが若い一詩人に書きおくつた手紙を引用してゐるがリルケは、そのなかで、眼を內に向けよといふことを力說してゐる。そしてもしも自分が書きたい、書かねばならないと思つた、そのことを書くことをこばまれたなら、自分は死んで

しまふより仕方がないかどうか、書かねばならぬことの動機に、それだけのものがあるかどうか反省せよといふ意味のことをいつてゐる。

私の受けた空虛感も、結局この描かれた世界と自分との結びつきの輕薄さに起因してゐるのだ。文學が文學として生き得るかどうかといふことは、題材の問題ではない。この結びつきの問題である。

今日の大きな變動期に遭遇して、作家の眼は、確かにたくましく大きな世界に向けられた。しかしそれだけでは仕方がないのである。製作の文學的地盤といふことについて、今こそ、作家は猛省しなければならないのだ。

作家の新聞記者化といふことは、瞬時パッとした火花を散らすかもしれないが、それは結局、文學を滅ぼす道である。

ひとを眞底動かす小説は、ほんとの作家精神に生きる人間のこころの叫びであること以外にはあり得ないのだ。このことは今月「離鄕記」の佳作を示してゐる上林曉氏も「文藝」に

書いてゐる時評で適切に述べてゐる。かういふ狀況のなかで、さつきからしばしば頭に浮んでゐるのであるが、最近「市井集」や「現代作家論」を上梓した淺見淵氏のことなど考へてゐると、かういふ純粹な存在のあつてくれることに、しみじみとしたありがたさを感じるのである。

作家は、もつと自分を大切にしなければいけないし、自分の世界に根ざさなければいけない。作家としての宿命に沈潛し、作家としてのみづからの小宇宙を確立してゐなければ、ほんとにひとを動かす作品などといふものは生れるものでない、時流に乘つた素人の小說のだらしなさを見れば、ひとびとは、すぐ、そのことに思ひいたる筈である。

「中央公論」では、今月懸賞小說の結果の發表をしてゐるが、この發表を見て一層切實に思ふことは、素人のかくれた作家などは全くどこにもゐないといふことだ。大田洋子氏にしても、中井正文氏にしても、岩越昌三氏にしても、みんなその道に年期を入れたひとたちであ

り、文壇といふ場所に暮してゐれば、古くからその名前を見てゐるひとたちである。新人推薦の芥川賞の發表ももうすぐあるであらうが、芥川賞にしても、今日までそれを足場に登場してきたひとたちも、全部長年の作家生活を生きてきたひとたちばかりである。

ちよつと風變りな事件を扱ふなどといふことからは決して作家は生れないのである。作家には作家の生活があり、その生活に根ざして人生を描かなければならない。單に時流的な材料と事件を追ひかけて空虛な力作を書いてゐる作家たちは、もつと反省せねばならぬ。ジャーナリズムに踊らされてゐるうちに、文學からしめだしを食ふのである。

私は作家としての自覺をつよく主張して「中央公論」の當選作家たちも、ながい文學生活をしてきたひとたちだといふことを述べたが、この當選作をかならずしも支持してゐるわけではないのだ。

今月は、まだ大田洋子氏の「海女」が發表されてゐるだけであるが、この作品はいかにもつまらない、一應書けてゐるといふだけのものにすぎない、かういふ作品を讀んでゐると長

年文學のなかに生きてきたために、單に文學のマンネリズムで、ものを見てゐるだけであつて眞に人生の現實を「自分の眼」でしつかり掴へず、却て文學的であることが害になつてゐるやうである。

文學的に全く素人の作品と思はれたのは、今月では「新潮」が呼びものとしてゐる無名の新人奈知夏樹氏の「フライムの子」三百五十枚である。この作品からは、文學に毒されてゐない眼の純潔を感じることができた。現實に直接からだあたりをしてゐるし、文學などといふなまじつかなよりどころがないために、自分自身で考へてゐる。そして大切なことは、そのことが、この作品を文學として生かす基礎になつてゐる。なかなか獨創的な感受性もあるし、磨かれていつたならば、大成するかもしれない才能の芽は、いたるところに散見してゐる。その點、文學のマンネリズムに落ちいつてゐる大田洋子氏の作品には見られぬ、文學に毒されてゐない新鮮な感じがあるのである。この作品は確かに自分の小宇宙をもつたものである。

しかしそれは、この作品のなかに見られる萠芽であり、むしろこの作者がもつてゐる可能性に、この作品ではとどまつてゐるのだ。私は、この作品に對して、前に述べたやうな半面の厚意は感じたのであるが、もつとつよく感じたことは、作家として文學に年期を入れてゐない淺さである。この退屈な理窟の多い三百五十枚の小說をよみ通すためには相當な努力がいるのだ。なんともいへないたどたどしさは、まだいい。身勝手ないい氣さが、決して底深くひとを納得させる力をもたないのである。いかにもひとり合點である。そのひとり合點の理窟をくどいほどくりかへすことで三百三十枚を費してゐる。この三分の一の枚數に壓縮して、この異常な人生は描くことができるし、それだけの壓縮をすることで、このいい氣な理窟ののさばることを防ぐべきである。

さういふ點、この小說の主人公は、自分の苛酷な運命のなかを生き拔けることだけで、或ひは精いつぱいであつたかもしれないが、それを描かずにゐられない情熱のなかでは、その苛酷な運命のなかで自分をしつかり育てゝゐるといふよりは、その悲劇を孤獨におかれたも

のが、急に訴へる相手をみつけたときのやうな、甘えた誇張をしてゐる。磨かれてゐないし練られてゐない。

かういふものに接すると、文學に年期がはいつてゐるといふことが、どんなに大きな意味をもつたことかといふことを、つよく感じるのである。しかしこのおそろしいほどの未成品のなかに、私は嫌なかたくなな性質も感じたが、とにかく描くために借用した人生によつて作品をつくつてゐるのではなく、自分の叫びをもつてゐることによつて、その將來を見守りたいと思ふ。

今月の創作欄では「改造」の丹羽文雄の「人生案内」は、一應佳作に數へるべきものであらう。宇野浩二の「木と金の間」(文藝春秋)は、特にとりたてていふべきこともないが、さすがにゆるぎない大家の大文章といふことのできるものである。

日常生活から

十月九日

第二日曜、晴天秋日、淺見淵氏たちのハイキング第二回例會にゆく。午前九時、池袋驛集合、保谷から歩いて平林寺にゆく。

この沿道の田園の秋色の美くしさに、こころ動かされる。農家の散在する、このあたりの武藏野の景色は、實に變化に富んでゐる。武藏野風景の、あらゆる形は、平林寺までの二里の行程のなかに盡きてゐるとさへ思つた。久しぶりに自然といふものを、しみじみ感じるといふよりも、なんと僕たちの生活は、自然に遠くあるかといふことを、つよく思つた。可成り以前に、北海道から歸つてきた高見順氏が、自分は自然には全く興味がないといふことを旅

にでて痛感したと書いてゐたが、興味があるないより、もはや僕たちは自然に全然遠ざかつて暮してゐる。今日の小說の自然描寫が、いかにお粗末になつたかといふことを反省してみても、それは考へられる。しかし、ここで自然觀察の再興を主張しようと思ふのではない。今は昔に比べて、自然以外に、僕たちのこころを動かすものが、いかに多く複雜になつたかといふことを感じるのだ。そしてさういふ僕たちのこころは、もはや直接自然を見ながらも直接に自然をみてはゐないのだ。自然は都會生活の前には後退してゐる。或ひは底深く隱れてゐる。もしも人間の前に、直接の姿をあらはしてゐるとすれば、それは文學者の前によりもむしろ科學者の前にであらう。

平林寺の池畔の腰掛で辨當を食べる。境內の掃除のゆき屆いてゐるのが氣持がよい。横にゐた木山捷平氏が、かういふ庭は見た眼以上に廣くて、なかなか掃除がしきれないものだと宮島資夫氏が「大法輪」の「平林寺便り」に書いてゐたといふ。その話で、蓬州宮島資夫氏が、ここにゐることがわかる。早速、同盟通信の小寺信重氏が、一行を代表して面會を求める。

寺を案内してもらつたあと、庭の芝生の上に、宮島氏を中心に一行十八名、圓座になつて所感をきく。横光利一氏が、「自分を見てゐる眼を見てゐる自分の眼」といふ風なことを書いてゐたが、あれは、ちよつと禪宗の世界に通じる氣持で面白いと思つた由。その他、辻潤、高橋新吉、ジエイムス・ジョイスなどといふ名前が、宮島氏の口から洩れた。話したことはながくなるから省略する。興味をもつたこともすくなくなかつた。

朝霞から電車、六時、新宿で解散。

十月十日

午前九時、書齋に入る。午前一時まで、坐つたり、寢ころんだり、腰かけたりして、小宮豐隆氏の大著「夏目漱石」を讀む。實に丹念忠實に調べて書いてゐるのに敬意を感じたが、僕には、あまり面白くなかつた。心理的な喰ひこみ方が、きはめて常識的で、どうも漱石の姿が立體的に大きく奥深く浮びあがつてこない。平面的だと思ふ。しかしその代りに偏重がないのが、この書物の價値であらう。漱石の生涯といふ事實を知るためには稀有な書物に違

ひないが、どうもこの筆者には人間的興味が湧き起らない。

このごろ出版された傳記小說とか作家評傳といふもののなかでは僕の讀んだかぎり、前田河廣一郎氏の「蘆花傳」を第一等に推す。これは、よく調べた蘆花の忠實な傳記であると同時に、前田河氏の書いた、もつとも立派な藝術作品のひとつである。ただ蘇峰を、あまりに一面的な型にあてはめたことは、この書物の奧行を淺くしてゐる。

今日は夕方、自轉車で一時間ほど近所を乘り廻した。

十月十一日

親類の會合があるので、朝から小田原町へゆく。行きの車中で、村上知行氏の「支那及び支那人」の殘りを讀み終へる。淸水安三氏や內村完造氏らとともに、村上氏は僕の興味をもつてゐる在支邦人だが、この書物は面白かつた。ただ、もつと自分の見聞の方を、豐富に書いてくれた方がいい。感受性にみづみづしさがあつて、觀察も正確である。そして實に新鮮な文章である。文壇でも、かういふ實のある新鮮な文章は、ながく見ない。工夫をしたわけ

でもあるまいが、特に獨創的な形容詞に實感味が、なかなかみちみちてゐる。

親類のひとたちの談話をきいてゐて思つたこと。自分がいい子だとだけ思つてゐるひとはこころの淺いひとだ。また、ひとを非難してゐることが、實は自分のなかの自分で氣づいてゐない自分を非難してることだけでしかない場合がある。また、ちつとも考へごとをしたことのないために、考へごとばかりしやべつてゐるひと、いつも考へごとばかりしてゐるために考へごとを少しもしやべらないひと。

歸りの汽車のなかで、今朝屆いた十一月號の、ある文藝雜誌の小說をよむ。鋭さがちつともなく、しかも實に忠實に捕へてゐる作品。どこといつてわるいところはない。しかしどこといつて取柄はない。しかも作者の人柄は實にいい。かういふよい人柄で、見ただけのものをひたむきに書いてゐる姿、おそらく、これは文學情熱といふものの、もつとも美くしい姿であることは間違ひない、しかもどうにもならない、かういふ作品に接すると、藝術は結局、才能だけに盡きるとつよくいひたくなる。

夜、丸ビルの集會室で、日本民族學講座の柳田國男氏の「民間年中行事」の續講をきく。

僕は、このひとの仕事には敬服してゐる。いつか、そのこと書きたいと思つてゐるが、ひとりぐらゐ、この講義をききにくる作家がゐるべきだと思ふ。

十月十二日

今日は靜かな雨だ。机前に坐して、じつと庭を見てゐた。雨の音が、あたりを却つて靜寂そのものと感じさせる。かういふなかに坐つてゐると、自分のこころだけが、周圍との調和を破つて、ざはざはしてゐることが、はつきりとわかる。もつと靜けさをとりもどさねば、自分の關心が、ほんとに深いところで廣く育たないと痛感する。

さう考へながら、今日の文壇を眺めてみると、藝術家としての深いこころの靜けさを失つてゐるといふことは、僕ひとりの缺點ではなさそうだ。今日の文壇に缺けてゐるものも、それだ。騷然として靜けさを失つてゐる。そのために、平常では通用しないやうな淺薄なものでも通じさせてしまう。眞にひとを打つ文學は、底に深い靜けさをたたえた文學でなければならない。「麥と兵隊」には、それがちやんとある。いい加減な戰爭文學は騷然としてゐるだ

けだ。

十月十三日

「思想」が今日、「東洋と西洋」といふ特輯號をだしてゐる。卷頭、和辻哲郎博士の「人類の教師」といふ論文は、近刊「孔子」の一節としてあるが、相變らず感動する。(博士の最近著「面とペルソナ」を是非、いろいろな意味で文壇人の一讀をすすめたい)實に微妙なことを實にはつきりといつてゐる。そして、ひとつのことを突込みながら、それがいつも確かな屏望のなかに置かれてゐる。この文章は讀むだけで、ひとのこころを高める。一體、この格調のある名文の瑞々しい艶は、どこからきてゐるのであらうか。ジャーナリズムの上で働いてゐるひとたちには、この重厚さが缺けてゐる。

もうひとつ推稱したいものは今村大平氏著の「映畫藝術の形式」。私は映畫評論家のなかで、滋野辰彦氏の人間的批評を高く買つてゐたが、これはまた別の立派な才能だ。實にしつかりと全體の姿を把握する力に敬意を感じた。このひとは映畫評論を高めるひとに違ひない。

「文藝」十一月號の北原武夫氏の「妻」は力のこもつた佳作である。盛りあがつてくる潤澤さに、少し缺けてはゐるが、それはあまり緊張して書いたために殺されてしまつたのかもしれない。しかし常識的推理をたよりに書いてゐる作家の多い今日、この眞摯なリアリティ追求の姿に、私はこころづよいものを感じた。おそらく今月では、注目すべき純文學の收獲であらう。

夕方、本屋まで「國語・國文」の「日本語の問題」特輯を註文にゆく。終日しとしと雨。

十月十四日

「文藝汎論」で、打木村治氏の「皮膚」を讀む。いつくしみのこもつた態度で、人物たちを見てゐるのには好感をもつたが、どうも結末が弱い。先月の「中央公論」のものも、とにかく、しつかりしてゐた。「部落史」が早く刊行されるといい。私は、あの本をたのしみにしてゐる。

「部落史」を出版する砂子屋書房主人の隨筆集「水鄕記」がでた。私は、あんまり期待をも

たないで讀んだのが、讀んですつかり感心してしまつた。このごろ私の讀んだ範圍では、もつとも立派な隨筆集だ。實に正確に見て、正確に書いてゐる。立派な文章である。私も、あんなものを書いてみたいと思つた。みんな、それぞれの味があつて、どれがいちばんいいといふことはいへない。ずゐぶん年期のはいつた鍛錬されたものである。伊藤整氏に會つたので、早速そのことといふと、「あれは立派なひとだよ、あのひとの歌を讀んだかね、歌もいい。奥さんの死ぬ前後の歌は實にいいね」といつた。

夜、松田甚次郎氏の「土に叫ぶ」を讀んで、このひとが宮澤賢治氏のお弟子であることに感激した。彼の蒔いた種が、今、實を結びつつある。立派な精神は受けつがれて、だんだん大きく生きてゆく。

十月十五日

私は金子光晴氏の詩やエッセイは、いつもずゐぶん注意して讀みのがさないやうにしてゐる。今日きた「エコー」の短文も、暗示に富んだ言葉だ。このひとは、浮んだ感想をひきの

ばさないで、そのままで投げだす。それが、妙に迫る力をもつてゐる。その短文の書きだしの一節。

「作家の作品のより所は缺乏感だと思ふ。僕は、缺乏感が根據となつてゐない作品を讀むにたへない氣がする。但し、これは作家の場合で、隨筆や、記錄や、その他にはあながち當てはまる言葉とは思はない。何故缺乏感が作家の根城となるかと云へば簡單である。缺乏感なくては創作の動機が起らないからで、又實に、創作の動機のない創作がいかに充滿せることよだ。しかし、一番困る奴は、缺乏感切實にして、創作できない僕らのやうな人間である。これは、作家ではないのだらう」

私は、このごろ餘暇には、殆んど啄木を讀んでゐるが、讀めば讀むほど感心してゐる。これだけ豐富な才能に惠まれながら、地道なものの考へ方に辿りついてゐるのは偉い。老成してゐる。評論家としての啄木は、あまりひとがいはないが評論家として傑れてゐる。このひとは、もつと生きてゐたら評論家になつてゐたのではないかといふ氣がする。彼が生きてゐて、明治の末期から大正にかけて、評論家として活動してゐたなら、確かにあの時分の評論

界は、今とは變つてゐたと信じる。彼の早世が惜しまれてならないが、啄木のあの純粋な感じは、早世によつて結晶されたものである。

いま机上にある書物は谷川徹三氏「日本人のこころ」、中川一政氏「顔を洗ふ」、ラヴェッソン「習慣論」

明日は久しぶりに街の方へ出かけていつてみよう。

跋

高橋一作

綱武さんと親交をむすんでから、足かけ四年になる。あらためて數へてみると、割に短い歳月である。その事實が、私としてはちよつと信じられない氣持である。それは綱武さんが高等學校の先輩だつたので、かなり以前から、その名前を知つてゐたことと、知りあひになつてからは、殆んど、絶え間なしに行來してゐたせいであらう。

ことに知りあひになつた頃の數ケ月は、同じ中野に住んでゐながら、妙に離れ難くなつて綱武さんの家と私の家を、かはりばんこに泊り歩いた。私などはありつたけの襁褓を抱へ、

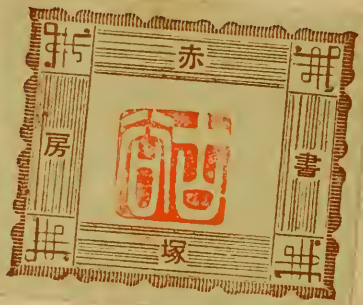
妻と産まれて間のない長男を引具して、厄介になつたこともある。お互ひに泊らぬ約束をしても、一日として會はない日はなかつた。會ふまいと心をきめたあとから、脆くも崩されて落ちついて机に向つてゐられなかつた。はやく根負けのした方が、家をとびでる破目になつてゐたが、遂に綱武さんは、「君とつきあふやうになつてから、仕事が手につかない」とこぼすし、私も疲れきつたので、それからは無理に間びくことになつた。いま週に一度位の割で會つてゐるのは、その頃の協定によるものである。

端でみれば、狂氣にちかい行來であつたかもしれない。また綱武さんに私といふ人間が、何を與へたかは知らないが、私は綱武さんのそのやうな惑溺的ともいへる熱情によつて、教へられたことが寡くなかつた。綱武さんは、懶惰で、自分を知ることに疎い私といふ實體を見抜いて、絶えずかたはらから突いて呉れる。私の文學に對する心構へも、そのやうにして搖ぶられ、固まつたのである。綱武さんの著書を丹念によんだとはいへないが、その作品よりもなによりも、根になつてゐる熱情を信頼してゐるいきさつは、一見、野放圖に見える行交ひからうまれてゐるのである。

この月のはじめに、私はひどく胃をそこねて臥つてゐた。見舞ひに來てくれた綱武さんは病氣が快方に向つてゐることを知ると、「仕事をしなければ駄目だよ。一日一日、日は過ぎていくんだからね」と嚴しい苦言を放つた。そして赤塚書房から、新著を上梓することをきいた。綱武さんのいままでの著書は、殆んど、私と親交をむすんでから、世にでたのである。それにまたこの著書が加はるといふことは、怠け放題をきめてゐた私にとつて、安閑としてはゐられぬと切實に思つた。私は一男一女を創作したにすぎない。文章上に於ては、綱武さんにたびたび諫言されながら、いまだに碌に仕事らしい仕事をしてゐない自分が面目なかつた。綱武さんの友情をかへりみて、この跋文かいたのを楔として、一心に仕事をしたいと思つた。

四月十九日

作家の世界



昭和十四年五月十五日印刷
昭和十四年五月二十日發行

定價 八十錢
外地定價 八十八錢

東京市杉並區東田町二ノ一五四
著作者 古谷綱武

東京市小石川區鶯籠町五番地
發行者 赤塚三郎

東京市小石川區鶯籠町五番地
發行所 赤塚書房
電話大塚五四二番

東京市小石川區鶯籠町五番地
印刷者 宮島富治

新文學叢書刊行に際して

新文學叢書は、未だ些かも疲れぬ素樸な精神と、新鮮な筆觸とを持つ、現文壇の潑剌たる新作家新評論家たちを網羅してゐる。卽ち、明日の文學を約束してゐる新鋭叢書である。眞に新しき文學精神に觸れたいと念ずる者の、蓋し手離すことの出來ぬ座右の書である。

フランス綴美裝

新文學叢書

定價八十錢
送料六錢

跳ぶ女　丹羽文雄
獻身　佐々三雄
路地　張赫宙
子の死と別れた妻　古木鐵太郎
莨　湯淺克衛
南の海　光田文雄
挿話　榊山潤
春秋　外村繁
生物の譜　福田清人
女の職業　徳田一穂

赤塚書房版

新文學叢書

フランス綴美裝

定價八十錢
送料六錢

無國籍の女　淺見淵

傳書鳩　岡田三郎

現實批評論　青柳優

作品の印象　田邊茂一

現代作家論　淺見淵

文學愛　上林曉

鳥打帽　田畑修一郎

飾窓　春山行夫

赤塚書房版

佐々三雄著

獻身

フランス綴美装
定價八十錢　送料六錢

「獻身」に收められてゐる五篇の作品中「憂碑」を除いては、僕の氣持が鬱屈してゐるとき幾たびか繰返し愛讀した作品である。佐々君はいつだつたか自分は二行か三行の文章にも苦心慘憺することがあるので、らくらくと書いてゐる小說を見ると莫迦みたいな氣がする、と云つてゐたことがある。從つて、いづれも心象風景が誤魔化さずポヤかさず適確に鮮明に、そしてデリケイトに描き出されてゐる。即ち、倨傲にして高貴な近代精神が、茫漠たる現實と接觸して打ちくだかれ、しかもなほ打ちくだかれた破片の幾つかを矜持を素直で素朴な心情の波頭がイキイキ寫されてゐるのである。」（淺見淵氏）

内容

獻身
憂碑
片雲
孤獨の計
あそび

赤塚書房版

佐藤春夫の「田園の鬱憂」を凌ぐ
新しき世紀の青春の書

隨筆集

飾窓

春山行夫著

定價八十錢　フランス綴美裝

★胸のボタンにクチナシの白い花を挿してアスベスクな露臺でピカソの美術論を讀んでゐる詩人であり、ブリュヌチエールやテイボオデの御弟子であるアカデミイ派の文藝批評家であり、『ニューヨオク・タイムズ』や『パリ・ソワル』に青鉛筆で忙しさうに線を引つぱつてゐるジヤーナリストであり、英、米、佛文學の紹介者であり、文化評論家であると同時にシリイ・シンフオニイの專門家でもある春山行夫氏の新しい隨筆集です。

内容目次

漱石とチユリップ
ルナアルと吉村冬彥
批評とエッセイ
手帳
日用語の典味
海水浴
鉛筆
ヴエスヴイアス
綠色のマヌカン
ペレ
植物園
エヴリマレ文庫その他
標題のポエジイ

赤塚書房版

長篇

痴人淨土

張赫宙著

四六判三〇〇頁
定價一圓三十錢

福岡日々連載の名作

生れ故郷では凡ての人に一痴人として嘲罵の生活をよぎなくされてゐた一人の少年をラツシ來たつて、全く彼を知らない半島南端のとある農村の叔父の元で生活させた。そこでも次々と障害は起つた。けれども暖い理解のある生活を築こうとの意慾に燃える彼は遂にそれらの障害に打勝つ日が來た。

この物語に讀者は切々と迫る情愛と盡きざる興味に吾を忘れるであらう。

事變下第一の面白い讀物として必讀の良書である。

赤塚書房版

十和田操著

長篇小說

屋根裏出身

（櫻木俊晃裝）

定價一圓

この小說は作者に云はせると「屋根裏出身」ですが、讀者から見れば「屋根裏探見」なのです。よみ出したら、こんな樂しい人情の世界があるのか、と思はずうれしくなつて了ふのです。萬華鏡と云ふ、子供の玩具がありますが、この小說こそは、千變萬華鏡のやうに、くるりくるくる、いくら讀み直しても興味が盡きません。そして、この小說だけは、つまらんレツテルなど貼られぬ、唯一無二の純情さを保つてゐることを誇りませう。

赤塚書房版

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03001 6455

PL
723
F84